

サッチャー元首相の『回顧録』に見る炭坑ストライキ(1984-85年)

山崎 勇 治

目次

はじめに

- 第1章 「スカーギル氏の反乱」に見るサッチャーの炭坑スト対策
- 第2章 『回顧録』出版の歴史的意義
- 第3章 サッチャーの炭坑スト潰しの上にあるブレアー結びに代えてー
- 第4章 回顧録「スカーギル氏の反乱」

はじめに

イギリス経済がEU諸国の中で好調である。失業率は日本より低い3%台である。「イギリス病」とかって揶揄されていたイギリス経済がこのように立ち直ったのは不思議なくらいである。

私は、九州経済学会(注1)で「サッチャー政権下の炭坑ストライキとその意義」のテーマで報告をした。

トニーブレア労働党政権の、いわゆるニューレーバーを可能にしているのはサッチャーの行財政改革ではないかと言う仮定のもとで報告をした。

とくに、イギリス病の根源の1つである、イギリス石炭業と炭鉱労働組合にサッチャーがメスを入れたことが大きかったのではないかと、その視点から炭坑ストライキを取り上げた。

20年前の1986年にイギリスに滞在していた私は、後から述べるイアン・マグレガー石炭庁総裁や、ミスター「国有化」と呼ばれていたトニー・ベン元産業大臣、南ウエールズ炭坑労働組合委員長ジャック・ジョーンズ、サッチャーの炭坑労働組合分断政策の結果作られたと言われている第2組合のロイリンク書記長、ファイナンシャル・タイムズの炭鉱スト担当記者John Lloyd(注2)、TUC幹部などとインタビューし、それらのインタビューを論文にまとめて報告したことがある。

さて、サッチャー氏が数年前に回顧録を公刊され、日本でもそれを石塚雅彦氏が立派な翻訳をされている。

そこで、本稿では、マーガレット・サッチャーに登場を願って、彼女の口から直接に炭坑ストに対する基本的な戦略を聞いてみることにする。そのことによって筆者の仮説が正しいかどうかを判断したいからである。

前述したように、サッチャー女史が分厚な“THE DOWNING STREET YEARS”, Harper Collins publishers, 1993. (『回顧録-ダウニング街の日々』)(注3)の中にスカーギル炭坑労働組合(NUM)委員長といかに対峙したかについて1章を割いて詳しく述べている。

しかしながら残念なことにサッチャー女史の資料的価値のあるこの貴重な回顧録を一瞥しただけでは彼女が炭坑ストの展開をいかに主導的に扱ってきたかについて理解することは必ずしも容易ではない。そこで、炭坑ストを研究テーマとし、さまざまな当事者に会った経験を生かして「スカーギル氏の反乱」を解剖することにする。

(注1)九州経済学会、2006年12月2日、於；北九州市立大学

(注2) John Lloydは” Understanding The Miners’ Strike “Fabian Tract 504, June 1985、を出版してその年のジャーナリスト賞を授与している。

(注3) MARGRET THATCHER, ‘ Mr Scargill’s’ s Insurrection—The background to and course of the years-long miners’ strike of 1984-1985- ‘

“THE DOWNING STREET YEARS” ,Harper Collins publishers, 1993.

マーガレット・サッチャー、「スカーギル氏の反乱」、『サッチャー回顧録—ダウニング街の日々』上下、(石塚雅彦訳、日本経済新聞社、1993年11月)

解剖の順序は、第1に、分厚な「スカーギル氏の反乱」を分かり易く整理し、サッチャーが政治生命をかけて戦ってきたストライキの展開を、サッチャーがどう記録しているのかを見たい。第2に、その結果、「スカーギル氏の反乱」から見えてくるものを述べたい。第3に、今日の好調なイギリス経済の基礎はサッチャーの炭坑スト潰しとどんな関係があるのかを、ブレア労働党政権のニューレーバー政策との関連で検討したい。

最後に、「スカーギル氏の反乱」の各段落に小見出しを付けて読みやすくしたので、それを資料として紹介したい。

第1章 サッチャー著「スカーギル氏の反乱」に見るサッチャーの炭坑スト対策

サッチャーは「スカーギル氏の反乱」において炭坑ストの展開を以下の6段階に分けて記述している。

第1段階、炭坑ストが起こるその背景

第2段階、ストライキ開始

第3段階、長い忍耐

第4段階、潮の流れが変わる

第5段階、ストライキ崩壊の始まり

第6段階、ストライキの終わり

本稿では、6段階のそれぞれについて要約し、その特徴を述べたい。

第1段階「序」

イギリス労働党は1983年の総選挙でサッチャーに大敗した結果、2度と社会主義を目標とすることができなくなったことを強調している。

しかし、極左マルクス主義者のアーサー・スカーギルの率いる全国炭坑同組合(NUM)が健在であり、これを叩き潰さない限り、安閑としてはおれない。

アーサー・スカーギルがNUM副委員長時代の1974年に、ヒース保守党内閣を打ち倒したという保守党にとって忘れがたい経験をしているからである。彼は、サッチャーをまたもやストライキで打倒することを虎視眈々と狙っていると、彼女は確信していたようだ。こうした背景には、イギリスで石炭産業は産業革命の基礎をなし、第1次世界大戦前には炭鉱労働者数が100万人を超え、炭坑数も3000箇所を超え、生産高は2億9200万トンもあり、歴史的に特異な産業であった。その結果1926年ゼネスト、1946年炭坑の国有化、1950年石炭産業計画、ヒース政権がNUMのストによって倒されるなど、イギリス社会に大きな影響を与えてきた。そのためにNUMは何でもできる聖域であると錯覚している、とサッチャーが疑っていたからだ。

サッチャーは首相になって炭坑ストライキ対策を次々と打ってきた。

第1にアメリカ人のイアン・マクレガーを6億円で石炭庁総裁に任命した。第2に、フライグピケットの禁止法、第3に、同情ストの禁止など新たなスト禁止法を作った。第4に、ストに備えて石炭備蓄に勤しんだ。第5に、炭坑閉鎖・炭鉱労働者削減計画を密かに作成した。いわゆる「リドレイ計画」である。

第2段階：「ストライキ開始」

1981年炭坑スト後に、イアン・マクレガーが石炭庁総裁に就任し、アーサー・スカーギルがNUM委員長に選出され、2人対決は避けられなくなった。

1983年10月21日、第1回目の2人の交渉が開かれた。ピーター・ウオーカー・エネルギー大臣とサッチャーは固唾を飲んで見守った。

スカーギルは5・2%の賃金引上げと炭坑閉鎖計画に反対して結局残業拒否を宣言してこの会談は決裂した。

1984年3月1日、マクレガーはこともあろうにスカーギルの膝元であるヨークシャーの炭坑を閉鎖すると発表した。明らかにマクレガーのスカーギルに対する挑発である。しかしサッチャーそれは偶然であると弁明している。スカーギルはUNM組合員の投票を行わずに直ちに抗議スト宣言を下した。

3月12日にはイギリス全炭坑83炭坑中、81炭坑がストに突入した。警察官3000人をノッティンガムに結集して、ピケ隊による投票妨害を排除させた。

閣僚会議の招集して警察官が働きやすいように政府、司法、の関係を考慮するサッチャー。

3月末には、スカーギルが大半の炭坑を支配していることが明らかになり、ストの長期化が避けられなくなったとサッチャーが憂慮している様子が述べられている。

また、スカーギルはストの違法性を突かれることを心配して、スト権確立に必要な投票率を下げたと批判している。

イギリス鉄鋼労働組合と発電所組合が炭坑ストを支援するいわゆる同情ストを拒否したことに安堵している。しかし鉄道組合と海運組合の2つの組合は3月末に炭坑スト支援を約束したことは恐れている。

4月17日には、セイント・ジェームズ・パークにあるリビア大使館から何者かが機関銃を発射してデモ隊の警備に当たっていた婦人警察官を射殺した。またその日にはスカーギルはリビアの高官と接触しており、NUMの幹部はガザフ大佐と会見までしていた。これらの事件に

サッチャーは驚きと怒りを現している。

第3段階、「長い忍耐」

5月23日(水)、スト開始以来最初のマグレガーとスカーギルの会合が開かれた。

NCBは経済性の無い炭坑は閉鎖すると説明。スカーギルは石炭が存在する限り無くなるまで掘り続けるべきだと、一方的にまくし立てて決裂。

それ以降1週一週と泥沼化していく炭坑スト。5月29日には5000人の警察とピケ隊との衝突。レンガや投げ矢などあらゆるものが警察めがけて投げつけられた。その様を何百万人国民とともにサッチャーもテレビを見ていた。

5月24日(木)には、NUMの違法行為を非難し、いかなる暴力をも許さないと演説をバンパリーで行った。

スト組の炭鉱夫による、スト破りの家族が脅迫される事件が頻繁に起こるようになった。

新たに作ったNUM対策法が活かされていないと嘆くサッチャー。

また炭坑夫の夏季休暇による悪影響が出始めた。

7月9日、運輸一般労働組合(TGWU)がNUM支援ストに突入した。全国港湾労働制度に違反して、TGWUメンバーで無い労働者が働いたことがストの原因であった。この7月16日、サッチャーが全国海運評議会に出席したところ、TGWUのスト宣言を聞いて全国海運評議会のメンバーの間に敗北ムードが漂っていた。なぜならば石炭を大量に使用する英国鉄鋼公社に影響が出始めてきたからである。

7月20日に、しかし港湾ストは突如として終結した。10日間のストであった。サッチャーは胸をなでおろした。

7月上旬、NCBとNUMとの交渉がもたれた。マグレガーがスカーギルに大幅譲歩する気配が感じられ、サッチャーは気をもんだ。しかしスカーギルがマグレガーの妥協案にも合意せず、ついに7月18日に決裂し、サッチャーは胸をなでおろした。

7月25日、ウオーカー・エネルギー大臣と電力公社総裁との密談で、発電所向けの石炭が確保できる可能性が出てきたことを確認しあった。

ただし、鉄道労働組合とノッティンガムシャーの炭坑労働組合を敵に回してはいけないことも確認しあった。そのためにはこの2つの労働組合の要求は全て受け入れることも確認しあった。

7月31日、下院議会の席でサッチャー首相は、ネイル・キノック労働党首の炭鉱ストに対するあいまいな態度を痛烈に批判した。

8月7日、NUMヨークは今回の投票なしのストは違法ストであると提訴を起す。

この間、ピケ隊の根拠地であったノッティンガムシャーからピケ隊がダービーシャーの反スト組の子供を含めた家族に深刻な暴力行為を行い、それがエスカレートしていった。彼らは作戦を変えて個人攻撃を開始したので、警察官がダービーシャー保護のためにホットラインを設置し、多数の刑事を張り込ませた。

8月23日、スコットランドのハンターストーン港に停泊している石炭運送船から、イギリス鉄鋼公社スコットランド支社が社員を使って石炭の荷揚げをした。TGWUの労働者は直ちに現

場から引き上げ、第2回目のストライキを宣言した。

9月18日、スト10日目にして幸いなことにTGWUはスト中止宣言を発表した。

8月9日-27日 スイスで夏期休暇を取ったサッチャーのもとに、「外交文書郵便袋」や緊急テレックスが終日鳴り止まず、休暇の気分にはなれなかった。

スイスから帰国すると、5897人の逮捕者と、1039人の有罪者が出ており、中には9ヶ月の投獄者も含まれていた。

8月15日、マグレガーがNACODSが立腹させてストライキを起こすという大失態を惹き起こしてしまった。NUMがストをしている炭坑ではTGWUも仕事が出来ないことは自明の理なのに、マグレガーは彼らに対してピケ隊を排除して炭坑で働くべきである。もし働かなければ賃金を支払わないと拒否してしまったのである。なぜそのような行動に出たのか理解できない、とサッチャーは頭を抱え込んでしまった。

9月9日、NCBとNUM交渉を再開したが、またもやマグレガーの方針が揺らぐように見えた。しかしスカーギルが彼の原則論を述べて会談は決裂した。

「職場復帰を求める妻の会」メンバーと初めて会見した。また、全国業炭坑就労委員会が結成された。

9月25日、TGWUの82%のメンバーがスト賛成を表明した。この流れをみたホワイトホールの官僚たちは、スカーギルの方がNCBよりも有利であると認識していることが分かった。

9月26日、スカーギル支配下にある炭坑夫の家庭も悲惨な状態にあることが、サッチャーケント州を視察したときに分かった。

10月1日、NCB、TGWUに陳謝してスト撤回に成功する。ただし、閉鎖する炭坑の最終的な決定権はNCBにあることを言明しなかった。TGWUに文句を言われたら元も子も無いからである。しかしこの問題は微妙な問題であった。

恒例の労働党大会が開かれ、労働党はNUMを支持し、警察を批判した。その上、キノック党首はNUMの暴力を、暴力一般にすりかえて暴力をふるうような状況を作っている現在のイギリス社会に問題があると総括したのである、とサッチャーは憤っている。

労働党大会後に開かれる保守党大会期間中、助言和解調停サービス（ACAS）によるNCBとNUMとの交渉の成り行きを見守った。

NCBは、炭坑閉鎖に就いて独立機関を設けてその調査報告書の勧告を尊重する、しかし経営決定権を放棄しないと主張した。NUMは即座に拒絶した。NACODSの態度は不明であった。しかし、この協議ではNCBがずっと主導権を握っていた。

第4段階、「潮の流れが変わる」

10月に入って状況がおおきく変わった。

第1に、10月24日、NACODSの執行部がストを実施しないと宣言したことである。第2に、高等法院からヨークシャーの炭坑ストは違法であるという判決が下されたことであり、更にそれを無視したスカーギルに対して、労働大会中にも関わらず逮捕礼状が送達されたことである。

10月10日、スカーギルと組合は、法廷侮辱罪のかどでそれぞれ1000ポンドと20万ポンドの罰金刑に処せられた。しかしNUMがそれを拒否したために、高等法院はNUMの資産仮差し押さ

えを命令した。その命令は、組合に対する強い経済的圧迫となり、組合の組織力は著しく損なわれた。

第3に、10月28日にサンデータイムズが、アフリカのリビアを訪問してカダフィ大佐に経済的支援を依頼したことをすっぱ抜いたことである。

第4に、ソ連のゴルバチョフ首相が、9月に別名でNUMに資金提供を認めたことが判明したことである。

これらの事実を国民が知るにおよんで、NUMに対する評価は大きく傷つけられてしまった。

11月19日までに職場復帰をすれば、クリスマス・ボーナスを与えると、NCBが働いている炭坑労働者にディレクト・メールで呼びかけた。1週間の内に2203人の炭坑労働者が職場復帰した。一番多かったのは、ノースダビーシャーであった。

11月12日、ストが中止となった暁にはストに加わらずに働いた炭坑夫の奥さんを首相官邸に招待する約束をした。

11月23日、暴力沙汰は一向に収まらなかったが、とくに非情なことがヨークシャーで起こった。スト破りを行なって働きに出た炭坑夫家族がスト組の炭坑夫から暴行を受けたのである。

11月30日にはもっと凄惨な事件が南ウエールズで発生した。高速道路の上に架かっている橋の上から、働きに行く炭坑夫を乗せたタクシーをめがけて、コンクリートの柱を落とし、運転手が死亡したのである。

スト反対の主婦たちの妻かR手紙が届いた。その内容は、NUMとNCBとの早期解決の要請であった。

12月初め、TUC書記長ノーマン・ウイリスが南ウエールズで開かれたNUM集会で、ピケラインで起こされたNUMの暴力行為を批判した。その会場では怒号と罵声とが浴びせられた。彼の勇氣ある発言にサッチャーは高い評価を与えている。

一般地方自治労書記長と機関工書記長は、ピーター・ウオーカー、エネルギー大臣と密かに会った。その席で彼らはTUCの仲介によるスト終結を希望した。サッチャーはこれに対して慎重に考える必要性を感じた。この提案を拒否すれば穏健な組合が政府から離れていくからだ。

12月5日、ピーター・ウオーカーは、7つの主要な組合の代表と長時間に亘って話し合った。

12月13日、官邸においてウオーカーおよび関係省庁の実務者とTUCにイニシアティブを取らせてスト中止を図っても良いものかどうかを協議した。

サッチャーは3原則を提示し、それをベースとしなければならないと主張した。

第1に、石炭産業の将来に就いての話し合いは、炭坑労働者が職場ふっきした後に行なう。

第2に、ストに参加しなかった労働者の地位について脅かす恐れのある条項は一切同意しない。

第3に、NUMに屈服したような印象ととられる炭坑閉鎖の延長は認めない。

12月14日、ピーターはTUC代表と会った。彼らはスカーギルの合意が必要で、クリスマス前にスト中止のイニシアティブは取れないと言ってきた。成果は全く無かった。

1985年1月7日にどれだけの職場復帰者が出るかに関心が集まった。もし50%以上の炭鉱労働者が職場復帰すれば政府の勝利である。

12月29日、現在の貯蓄炭の状況からみて、石炭不足による停電はありえないと声明した。

第5段階「ストライキ崩壊の始まり」

1月初め、職場復帰者は少なかった。

1月中旬には7万5000人の炭坑労働者が職場で働いた。次第に職場復帰率は上昇した。大体週に2500人ずつ復帰した。明らかにストは終わりに近づいていた。ストライキ地域では、就業を続けている炭坑夫が「前進基地」を作った。職場復帰した井と思っている炭坑労働者は、木曜日か金曜日を選んで、50人位の単位で集団を作って一緒に入坑したのである。

1月21日、NCBとNUMは交渉のための交渉を行うというニュースが伝わると、職場復帰者の数は半減した。

国民の関心事は、外国に隠匿されているNUM資金の仮差し押さえが旨く成功するかどうかに移った。差し押さえ係官がアイルランドヤルクセンブルグに派遣された。

1月末にはやく500万ポンドのNUM資金が取り戻された。

キノック労働党党首は滑稽であり、アーサー・スカーギルは絶望的であった。下院議会では、「炭坑ストライキ中、党首には2つの選択があった。1つはNUM執行部に抵抗する道と、沈黙を守る道とがあった。あなたはいつも沈黙の道を選択した。しかしいま炭坑スト派終結に近づきつつある。あなたはここにいても沈黙を守るつもりか？」と詰問した。

スカーギルは相変わらず、「不採算性の炭坑などありえない」、と主張し、ストを中止する気持が無いようである。

2月19日、TUC代表ノーマン・ウイリスをはじめ組合の指導者と官邸であった。

第1に炭坑閉鎖のプロセスについてはNCBとNUMの両者が完全に理解すること。

第2に、経営権と最終決定権を持つのはNCBであること

第3に、経済効率も閉鎖の決定条件に入れること

以上3点をサッチャーはスト終結の条件として譲らないと声明した。

ストライキの終わり

2月27日、職場復帰率が鍵となる50%を越えた。

3月3日、(日) NUM代表者会議は投票を行い、スカーギルの助言を無視して職場復帰を可決した。もっとも過激な地域の労働者の坑内に戻った。

報道陣のインタビューに答えて「スト中でも働いた労働者全員の勝利である」と言った。

5月、マグレガー総裁と会見。ストを離脱した労働者とその家族に危害が無いように配慮するように伝えた。

1年に及んだ史上最長の炭坑ストの歴史的意義については以下の2点である。

第1に、NUMは最初から最後まで採算の取れない炭坑の閉鎖を認めないと主張してきた。国際競争力の無いイギリス石炭業がいままで存続できたのは、国有化と強制労働指導、関税障壁があったからである。ところがスカーギルはそれを望んでいたのである。ストの本質がそこにある。還元すると、石炭業をテコに革命を試みていたスカーギルの野望が暴露されたことである。

第2に、国際競争力の無い産業は淘汰されるべきである。

第3に、極左マルクス主義労働組合がイギリスを支配することは不可能となったということをも一人一人の国民が理解したことである。

第2章 『回顧録』の歴史的意義

サッチャーは、炭鉱ストを綿密に語っている。それはあたかも彼女の日記帳を公開しているかのようなものである。その結果、炭坑ストライキに関するいかなる他の書物よりも時系列的に語っているため炭坑ストの展開過程が分かりやすい。

その中であって、サッチャーはスカーギルとの対決はイギリス経済再建のためには避けて通れないものと認識している。なぜならばイギリスを支配するのは決して過激な労働組合ではないことを国民に知らせる役割を彼女は持っていた。すなわち1974年にはヒース首相がスカーギルの率いる炭坑労働組合に倒されたという屈辱を晴らすだけではない。民主主義の根幹を揺るがしかねないとの危惧からであった。

スカーギルとサッチャーとの相違点は、イギリス経済の中での炭坑の位置づけにあった。サッチャーは、採算が合わず、財政援助でしか存続できない産業は淘汰されるべきだという考えであった。スカーギルは、これに対して炭坑を閉鎖すればその炭坑村人たちはどんな生活手段があるのか、失業した炭坑夫を誰が養うのか。生活保護よりは炭坑で働かせることによって彼ら自身が稼いで生活する方がよほど健全である。そのためには採算を度外しても炭坑を守るべきだ、と考えていた。

産業革命以来イギリス石炭業は、イギリス経済を支えてきた。炭鉱労働者は劣悪な条件の元で200年以上も最も劣悪なで働いてきた。それを目先の採算性だけで切り捨てられてたまるものかと言う憤りがあった。そのために、炭坑ストライキは容易に収まらなかった。

サッチャーが勝利を確信できたのは、ストが始まって7ヵ月後の10月1日のNACODS がストライキを撤回した瞬間からであった。NACODSがMUMをそれまでどおり支援ストを打っていたらサッチャーの勝利は無かったか、あるいはあってもずっと遅くなっていたかも知れなかった。それまではスカーギルの方が有利にストを展開していたから、ホワイトホールの職員までもがサッチャー不利を口に出してまでいたのである。

サッチャーは、アメリカ人のイアン・マクレガーを評価してイギリス鉄鋼公社の総裁にした。彼はイギリス鉄鋼公社を見事に再建させた。サッチャーは彼の再建能力を高く評価して石炭庁総裁に就任させたが、彼は実業家であり、政治家ではなかったのでスカーギル委員長にしばしば騙されたり、駆け引きで負けたりしていた、と必ずしも高い点数をつけていない。

労働党党首ノネイル・キノック氏をサッチャーがどう見ていたのか。彼女は古いタイプのキノック氏はずるくて信用できない人物とみている。しかし、労働組合に依存していた労働党にとって、ストライキ反対と言える立場ではないことは自明の理である。TUCも同じ立場であった。サッチャーはこの際に労働党をも弱体化させようとしたのではないかと思える。

「ミスター国有化」と称されていたトニー・ベン氏は、サッチャーの強引なやり方はイギリス国民なら誰でも嫌がっていると述べている。保守党の中でもサッチャー批判の声が上っていた。

多くの警察官が出動して、暴力を国民に振るったことはかってないことであった。サッチャーは丸腰の警察官から武装した警察官へと変えていったといわれている。

炭坑ストライキは、日本でこそあまり報道されなかったが、世界の注目を浴びていたことに特徴がある。ロシアのゴルバチョフ氏が別名で資金供与をした事実や、リビア大使間から機関銃で婦人警察を射殺した事実や、NUM幹部がリビアを訪問して資金提供を依頼した事実をサッチャーは知っていることから分かる。

サッチャーは、スカーギルの面子を徹底的につぶしてストの終結を図ろうとした。

ある炭坑を閉鎖するかどうかの決定権は経営者であることをNUMが認めない限り、スカーギルといかなる交渉もしない、と高飛車に出ているところからも窺える。

1985年3月6日、スカーギルの意見を聞かないでスト組労働者は職場復帰をしていった。

いずれにしても権力者サッチャー氏の回顧録「スカーギル氏の反乱」には他の資料的では見られない権力者側の情報を知ることが出来る貴重な資料と言えよう。

第3章 サッチャーの炭坑スト潰しの上にあるブレア 一結びに代えて一

今日のブレア首相によるイギリス経済の好調の遠因を、サッチャー首相の労働組合の弱体政策に求めた筆者は、サッチャーの回顧録からますます確信を持つようになった。

トニー・ブレアは1995年4月の臨時労働大会で、労働党綱領第4項の書きかえに成功した。社会主義を目指すために基幹産業の国有化や福祉国家を掲げ、守り続けられてきた労働党魂を、彼は抜き去ってしまったのである。

またブレア党首は、労働組合との関係もなくした。労働組合が労働党を牛耳ることが出来なくなったのである。

こうしたことが可能となったのは、1979年にサッチャーが政権に就き、保守党の選挙公約を次々と実現していったからであった。すなわち1980年雇用法、1982年雇用法、84年労働組合法で、同情ストの禁止や、フライングピケットの禁止や、クローズドショップ制のなし崩し的崩壊や、役員承知の不法ストの場合は巨額の罰金が科せられ、それを拒否すると重罰をさせられるか法廷侮辱罪等によって組合の財産を没収されることとなったのである。

なぜ一連の雇用法や労働組合法が制定されたのかと言えば、1970年代には労組が政治を牛耳っており、イギリス国民は労働組合のストライキに怯えて暮らしていた。1972年炭坑スト、74年炭坑スト、1979年当時、公務員労組や医療サービス労組などを挙げる事が出来る。

サッチャー保守党首のサッチャー女史はこうした国民の労組への批判を一身に受けて労働党から政権を奪うことに成功したのである。

炭坑ストライキ後、1985年から90年までに全国の170炭坑のうち94炭坑が閉鎖された。その間、NUMは80%の組合員を失った。おまけに、サッチャーに従ったノッティガムシャーの炭坑も、結局は閉鎖の憂き目に会った。優良炭坑でも閉鎖されるのであれば、スカーギルと一緒にになってサッチャー政権を倒しておけばよかったと嘆いても後の祭りである。サッチャーに裏切られたのである。

1979年から99年までのサッチャー政権の間に労働組合員は激減して60パーセントになった。

このことによって、組合は国会議員を下院に送り込むことが出来なくなり、労働組合選出の国会議員の数が激減した。労働党を組合の資金が支えていたがそれも出来なくなった。労働組合の魅力が無くなり、若い労働者の組合離れが起こったのである。

このような背景を経て、ブレアはニューレーバーといわれる労働党に変身したのである。それは経営者からも恐れられない新たな政党作ることが出来たのである。サッチャー首相の炭鉱労働組合攻撃のおかげで、ブレア首相は、労働党綱領第4条を削除でき、ブレア経済政策が遂行できていると言えよう。

20年前の炭坑ストライキが終結した頃、筆者は炭鉱ストについていくとかの論文を書いた。それらの論文は「サッチャーは400万人の失業者を背景に、日本的経営を1つのモデルとして労働者の意識改革を迫ることであった。日本企業がイギリス旧炭坑地帯に進出する際に、TUCは確かにノーストライキ協定やシングルユニオンを認めているが、しかし、イギリスの労働者は経済状況が上向いて余裕が出来ればサッチャーの意図どおりには動かず、伝統の組合の団結はそう簡単には崩れず、守り続けるであろう。」という結論を出していた。

しかし、今日では、その結論を次のように修正しなければならない。すなわち、「サッチャー首相は労働者の意識改革には決して成功しなかった。しかし10年後にはトニー・ブレア新労働党党首を生むことが出来た。20年後には彼の手によってヨーロッパで最優等生となることができた。その意味でサッチャーの意図は達成されたと言えよう」と。

ブレアが自らは手を汚さずにさわやかな顔で政権を担当できたのはサッチャーのおかげである。サッチャーは汚れ役に徹して、NUM潰しに彼女の政治生命をかけた。

炭鉱ストは、365日を費やし、数名の死者を出したうえに、イギリス経済にフォークランド戦争の約2倍に当たる40億ポンド、1兆1200億円の経済的打撃をあたえたといわれている。しかしそれだけの意味がサッチャー首相にはあったのである。

第4章 回顧録「スカーギル氏の反乱」

序 †

(社会民主党選挙敗北)

イギリスの民主社会主義勢力は1983年の総選挙で、かつて経験がないほどの惨敗を喫した。党声明に、社会主義者としての目標を真正面に打ち出したあげくの敗北である。それだけに国内の左派は、大規模な産業国有化、莫大な公共支出、労働組合の権力強化、核兵器の一方的廃棄を柱とした政策で、国民の支持を誇ることは以後二度とできなくなった。

(極左マルクス主義者健在)

しかし、イギリスには非民主的な社会主義を奉じる一派もあり、彼らもまた打破すべき相手であった。極左翼の真の目的が何であるかは、疑う余地がなかった。イギリスにマルクス主義の制度を押しつけることを目指し、そのために手段を選ばず、いかなる犠牲もものともしない革命家、それが彼らの真の姿だ。メンバーの多くは、その意図を隠そうともしなかった。彼らにとっては、民主主義社会の諸制度は、マルクス主義の理想郷までの長い道中に横たわるやっかいな障害物にすぎない。一派は選挙戦の最中こそ、穏健派の支持を得る必要のために言動を

制約されていたが、敗北の余波のなかで鎖を解かれ、今度は自分たちの流儀で戦いをしようと、虎視眈々と機会を窺っていた。極左翼は、労働党、地方自治体、労働組合という三つの組織に地盤を築いており、それらを土台に、再度政権を委ねられたわれわれに挑戦しようとしていた。

（スカーギルとNUM）

突撃隊として戦いの口火を切るのは、マルクス主義者の委員長アーサー・スカーギルが率いる全国鉱山労組（NUM）と見られていた。彼らの意図は明白で、八三年の総選挙が終わってまだ一カ月もしないうちから、「この政府を今後四年間も押しつけられるのはごめんこうむる」と、スカーギル氏は公言してはばからなかった。政府に対し直接攻撃をするばかりか、誰であろうと何であろうと、自分たちを邪魔するものは叩きつぶす、たとえ仲間の炭鉱労働者やその家族だろうと 例外ではなく、警察、裁判所、法律、それに議会といえども、相手とすることを辞さないというのであった。

（スカーギルのスト不可避）

私は一九七〇年から七四年にかけての保守党政権の歴史から推測して、炭鉱ストに対処すべき時が来ることをほとんど疑っていなかった。一九八一年にスカーギル氏がNUMの指導者に選ばれた時点で、それを確信したといっていよい。

炭鉱ストはおおよそ望ましくなかった。経済的に何の合理的理由もないからである。石炭公社（NCB）、政府、それに鉱山労働者の大半は、石炭産業が繁栄し、競争力のある産業に育つことを望んでいた。ところが神話と絡みあった歴史は、イギリスの石炭産業を特殊な社会に仕立てあげてしまったらしい。道理が単純に通る世界ではなくなっていた。

（英国炭鉱、第1次世界大戦前ピーク）

イギリスの産業革命は、石炭が容易に手に入るという利点に大きく依存していた。第一次世界大戦直前の最盛期には、炭鉱労働者の数は百万人を上回り、炭坑も三千カ所を超え、生産高は二億九千二百万トンに達していた。しかし、以後はもっぱら下降線をたどり、労使の関係はしばしば悪化していた。

（1926年ゼネスト）

一九二六年に行われたイギリス史上唯一のゼネストは、石炭業界内の衝突がきっかけである（後の歴史を予示するように、ゼネストの後一年間続いた炭鉱ストで、炭鉱労働者組合は分裂し、ノッティンガムシャーに新しい組合が設立されている）。

二つの大戦のはざまに誕生した代々の政権は、石炭業界の合理化と規制に次第に深くかかわらざるを得なくなった。

（1946年炭鉱の国有化）

そして一九四六年、戦争直後の労働党政府の手で、石炭産業はついに完全に国有化された。その時には、炭坑数九百八十カ所、生産高一億八千七百万トン、労働者は七十万人強というところまで落ち込んでいた。

（1950年石炭産業計画）

そこで政府は、一九五〇年の「石炭産業計画」から始まった一連の文書で、生産量と投資額に目標値を定めるようになった。ところが需要も生産性の伸び率も、常に計画を下回り、目

標値に達するのは資金関係の数字のみという状態が続いた。国庫資金が次々と注ぎ込まれたが、能力過剰と採算のとれない炭坑の閉鎖に対する労働者の抵抗という、2つの問題はいつこうに解決されなかった。石炭産業そのものが衰退するにつれて、職場を確保するために、労働者はますます労組の力への依存度を深めていったのである。

(1972-3年炭鉱スト、ヒース政権を打倒)

1970年代の石炭産業は、イギリスの誤りをすべて象徴する存在になっていた。

1972年2月、アーサー・スカーギルの率いる大規模ピケは、数にものをいわせてバーミンガムシャーのソルトリー・コークス・デポの封鎖を強行し、このような暴挙の前になすすべのない、警察の無能ぶりがさらけ出された。NUMについては、発電所への石炭供給拒否という切り札を握っている、政府に対し生殺与奪の力を握っている、あるいは少なくとも、自分に不利な政策は拒否できる、といった神話が囁かれていた。それにさらに重みを加えたのが、七三年から七四年の炭鉱労働者ストの結果行われることになった総選挙でのヒース政権の敗北である。

(1981年炭鉱ストとスカーギルの委員長就任)

1981年2月に経験した炭鉱ストの脅威と、その回避についてはすでに触れた(178ページ参照)。以来スト再発は時間の問題だった。必至の試練が訪れる前に、迎え撃つ準備が十分整うかどうか、不安だった。八一年末に大きな転機がやって来た。スカーギル氏がNUMの委員長に選出され、NUMの実権とその刃が、公然と政治闘争を表明する人々の手に委ねられたのである。

(対炭鉱スト準備-石炭備蓄準備とナイジ・ローソン)

炭鉱ストに備えて、着実にしかも組合を刺激しないように石炭の備蓄を行うのは、主に89年9月にエネルギー相に就任した、ナイジ・ローソンの責任になった。その後数カ月にわたって「持久力」という言葉が、何度となく聞かれた。発電所の持久力を最大限に高めるには、石炭備蓄を構内に保管することが肝要だった。坑口に置いたのでは、ピケを張られたら動かせなくなってしまう。といっても、発電所の持久力を左右するのは、石炭備蓄の量だけではない。電力公社(CEGB)には、石油を使用している発電所もあった。これらの発電所は、普通はピーク時の需要をまかなうために特定の時間だけ使われていたが、「基本需要」、つまり多少なりとも一定している基本的な需要を満たすために、必要とあれば二十四時間の稼働も可能だった。「石油発電」は高くつくが、ストへの抵抗力を大幅に増す。しかも石油の供給網は、石炭に比べはるかに問題がなかった。一方、供給電力の14%をまかなっている原子力発電所は、ほとんどが炭田地帯からかなり離れた場所にあり、当然のことながら、その燃料供給については心配は無用だった。そのうえ、数年後には改良型ガス冷却式原子炉(AGR)が次々導入される予定で、石炭火力発電への依存度が下がることが期待されていた。さらに海峡を挟んで英仏両国を結ぶ送電システムも建設中だった。それが完成すれば、フランスから電力を購入することも可能となる。イングランドとスコットランド間には、スコティッシュ・インターコネクターと呼ばれる同種のシステムが、すでに稼働していた。

産業界に石炭備蓄の強化を奨励するために、最善を尽くすことも忘れなかった。

（ピーター・ウォーカーとマクレガーとの不仲な関係）

1983年秋、危険の兆しが見えてきた。エネルギー相の座にあったのは、私が総選挙後の6月に任命したピーター・ウォーカーだった。第1期政権時代に農務省で見せた、交渉の場における辣腕を買ってのことである。しかもウォーカーは、意思疎通の能力にすぐれていた。いずれ左翼の活動家が突きつけてくる炭鉱ストで国民の支持を確保するには、コミュニケーションの上手下手が、大きくものをいう。ピーターは新聞社の編集長と、定期的に電話で直接話し合い、政府の主張を伝えた。これは私が決して好んだやり方ではなかったが、ストに際しては、確かに有効だった。残念ながらピーター・ウォーカーとイアン・マクレガーは、心から意気投合というわけにはいかず、両者の間にしばしば緊張が生じていた。

（イアン・マクレガーの石炭庁総裁就任と旧勢力の排除）

イアン・マクレガーは9月1日にNCBの総裁に就任した。ブリティッシュ・スチール（BSC）会長として並々ならぬ手腕を発揮し、一九八〇年の、三カ月に及ぶ打撃の大きかったストライキの後、鉄鋼業界を好転させた経歴をもっていた。イギリスの石炭産業が、社会福祉の一制度としてではなく産業として繁栄するためには、彼こそ、経験と決断力を備えたふさわしい人材であった。攻撃的な炭鉱労組の指導者とは違って、イアン・マクレガーは、資金と技術および人的資源を有効に活用して石炭産業が繁栄することを、本心から望んでいた。彼の最大の長所は、その勇気だろう。NCBの内部にも、NUMを慰撫し彼らと協力関係を結ぶことで地位を築いてきた勢力があり、マクレガーがもち込んだ新しい雰囲気と反発を示す者も多かった。とはいえイアン・マクレガーは、駆け引きにかけては不思議なくらい無能であることをさらけ出してしまった。財政的な難問や難しい取引には慣れていたが、交渉を利用して少しでも多く政治的な得点稼ぎをしようとする労組指導者の扱いには不慣れだった。アーサー・スカーギルとその一派にしてやられたことも、1度や2度ではない。ストライキが行われている間、ピーター・ウォーカーと私は、事態が新しい段階に入るたびに、世論がどちらにつくかを憂慮しながら見守った。NUMのリーダーたちは、あらゆる手だてを用いて事実を歪め、国民と組合員に誤った情報を伝えていた。

（NCBとNUMとの交渉決裂—残業拒否闘争—）

1983年10月21日金曜日、NUMの代表者会議は、NCBが提示した五・二%の賃上げと炭坑閉鎖計画に反対して、残業拒否案を可決した。備蓄は十分で、残業拒否自体はあまり効果がありそうにもなかった。しかし、これには真の目的があったと思われる。おそらく、炭鉱労働者の気分を煽り、機が熟した時点でストライキを打つための心理的な準備をさせようと考えたのだろう。ストが起きるとすれば、その発端は、賃金の問題よりも閉山問題だろうと、われわれは常々考えていた。経済的理由から閉鎖を求める声は、いぜん圧倒的だった。労働党でさえ、それを認めたことがある。73年から79年にかけての労働党政権下では、32カ所が閉鎖された。ところがスカーギル氏は、経済的理由による閉鎖を認めようとはしなかった。埋蔵量がゼロになるまで採掘を続けるべきだ、というのがその持論である。「採算の合わない炭坑」などあり得ない、損失を出している炭坑は—それは数多くあったが—単に資金が不足しているだけだ、というのである。特別委員会に招かれ、耐えられない損失のレベルというのがあるかどうか見

解を求められたスカーギル氏は、「私に関与する限り、損失はいくら出てもかまわない」と、記憶にとどめるべき発言をしている。

(マクレガー、石炭再建計画発表)

83年の秋から冬にかけて、イアン・マクレガーは、石炭産業の再建計画を作成した。当時の就業人口は二十万二千人。独占合併委員会が提出した八三年の炭鉱業界の実情報告によると、炭坑の七五％が赤字であった。これを見てマクレガー氏は、八八年までに業界を収支トントンのレベルにもっていくことを目標に作業を進め、八三年九月、三年間で労働者約六万四千人の整理、二千五百万トンの能力削減計画を政府に提案した。とはいえ、噂で流れたような、閉鎖予定炭坑の「秘密リスト」といったものはなかった。どれを閉鎖するかは、続行中の調査結果にもとづいて、個々に判定する予定だったのである。十二月、マクレガー氏は再建計画を一段と強化することとし、二年間で4万4千人の人員削減を決意、そのために現行の余剰労働者解雇制度の対象枠を、五十歳以下にも広げるよう求めてきた。八四年1月に政府と合意に達した解雇条件は、就労年数一年につき一千ポンドの退職手当を、しかも一括払いするという、極めて寛大なものだった。有効期限は向こう二年間とされた。対象年齢までずっと炭鉱で働いてきた者には、三万ポンド以上が手に入る計算である。八四年、八五年で、マクレガー氏は二万人の整理を計画していたが、その数字なら、意に反して離職を迫られる者はないと思われた。閉鎖される炭坑は約20カ所、年間能力は400万トン削減されることになっていた。

(70歳のイアン・マクレガー、殴られる)

討議が続けられている間に、閉山予定の「秘密リスト」があるという噂が広まり、非難の声が上がり始めた。NUM指導部の主張は、現実からますます逸脱していった。特に、炭鉱業界が八三、八四年にかけて、国民の税金から十三億ポンドもの助成金を受けているという経済的な現実、まったく無視されてしまったようだ。スカーギル氏が戦いの火ぶたを切ろうとしているのが感じられた。二月の末、今回のストライキの特徴となった暴力による脅迫を预示するような事件が起きた。ノーサンバーランドの炭鉱でデモをしていた労働者が、七十歳のイアン・マクレガーを殴り倒してしまったのである。私はショックを受け見舞いの手紙を書いた。この後、事態はさらに悪化した。

(スカーギル、スト開始時期誤る)

ストライキがいつ起きてもおかしくない状況に陥っているのはよくわかっていたが、問題はその時期だった。われわれは冬が始まり石炭の需要がもっとも大きくなる時期、つまり八四年末以前には起こらないのではないかと見ていた。春というのは、NUM側にとっては最悪の作戦である。しかし、この点でスカーギル氏は大きな誤りを犯してしまった。なんと二月に入り、CEGBには八週間分の備蓄しかないといって、強硬論を唱え始めたのである。実際の備蓄の数字はずっと高かった。これは公表された数字から推定できることだった。しかし、NUMには、ストライキに入る前に組合員に投票を求める伝統があった。当時の情勢から判断すると、近い将来全国規模のストライキを実施するに必要な過半数(五五％)を、スカーギル氏は確保できないだろうと考えてもよい理由があった。スカーギル氏が組合委員長に就任して以来、す

で3度も、ストライキは否決されていたのである。われわれは、スカーギル氏があのような捨て身の作戦に出るとは予想できなかった。

ストライキ開始

（マクレガー、スカーギル膝元炭鉱閉鎖決定と抗議スト宣言）

3月1日木曜日、NCBはヨークシャーのコートンウッド炭鉱の閉鎖を発表した。しかしNCB地元支所の手際が悪く、炭鉱見直し調査が割愛されているという印象を与えてしまった。実際はNCBにそのような意図はまったくなかった。だがスカーギル氏のホームグラウンドである、過激なNUMヨークシャー支部の執行部は、二年前に行われた地区投票の結果を根拠に、抗議ストを宣言した。

コートンウッドの一件は確かにストライキの引き金にはなったが、原因ではない。実のところ、NUM執行部が、採算性を理由にした閉鎖は一切認めないと決意した段階で、NCBが石炭産業の効率的な経営をあきらめない限り、ストライキは避けられないものになっていた。コートンウッドの一件がなかったとしても、三月六日に行われたNCBとNUMとの会合は、同じ結果を生んだのではないだろうか。この会合でイアン・マクレガーは、再建計画の概要を説明し、二十の炭坑の閉鎖を認めた。NUMの反応は素早かった。その日のうちにスコットランド支部が三月十二日からのストライキを宣言し、二日後の三月八日木曜日には、NUM全国執行部が会合を開き、ヨークシャーとスコットランド支部のストに正式の承認を与えた。

（投票無視によるストライキ指令）

組合規約第四十三条によれば、NUMは全国投票で五五％の支持を得ない限り全国ストを行うことはできない。ところが執行部を牛耳る過激派は、全国投票で勝つ自信がなかったために別の手を考え出した。規約第四十一条によると、中央執行部は地方支部が宣したストに正式の認可を与えることができる。となれば、各支部にストに入るよう圧力をかければ、結果的には全国ストと同じ成果を得られる。しかも全国投票をする必要がない。渋る地区があれば、ストに入っている地区からピケ隊を送り込んで脅せばよい。この容赦ない作戦はほとんど成功するかに見えた。だが結局は、シナリオの作者が悲劇を味わうことになった。

（83炭鉱中81炭鉱スト突入）

ストライキが開始されたのは三月十二日月曜日である。以後二週間にわたって、粗暴な活動家からなる突撃隊が炭鉱地帯に押しかけ、一時は理性や品位のかけらも見られないような状態になってしまった。第一日目は、稼働していた炭坑が八十三、ストに入ったのが八十一カ所だった。そのなかの十カ所は、積極的にストに参加したわけではなく、ピケが厳重で働けなかったという話だ。しかし、夕方には操業を中止した所が、百に増えていた。警察は、働く意思のある者を援護しようとやっきになっていたが、所詮は負け戦だった。

内務省では大臣をはじめ実務者ができる限りの支援をしていたが、事態は悪化する一方だった。

（遊撃隊の投入による投票延期）

火曜日の朝、ふたたび遊撃ピケ隊が現地に送り込まれた。その日私はたまたま海峡トンネル

の件で、イアン・マクレガーと会う予定になっていた。この海峡トンネルは、炭鉱とはまったく関係がなかったが、彼が関心を抱いていたプロジェクトである。あとでウォーカーも加わって、われわれは炭鉱問題について話し合った。マクレガー氏はすでに、新しく定められた労働組合法を盾に、NUM執行部に対し、遊撃隊の使用禁止命令を高等法院から取りつけていた。しかし、警察は刑法に訴えることをせず、ピケ隊は出勤しても労働者の阻止に成功したようだと、マクレガー氏は語っていた。暴力による脅しが効いて、ランカシャー地区では、すでに予定されていたスト投票が延期された。ノッティンガムシャーとダービーシャーは、木曜日に投票を行うことになっていたが、投票そのものが中止される、あるいは投票に向かう労働者がピケ隊員によって阻止される恐れが濃厚になってきた。私は失望を表明した。これではまったく一九七二年のソルトリーの繰返しである。刑法による取り締まりが必要であった。働く意思のある労働者を助けるだけでは十分ではない。暴力による脅迫そのものを阻止しなければならないと、私は強く訴えた。

(刑法によるピケ取締りの必要性)

この会議の後、直ちにレオン・ブリタン〔内務相〕に会見を申し込んだ。運よくその日の次の会議は、国民生活にとって不可欠の業務分野におけるストライキについて話し合うために招集されていた。われわれが党声明に記した問題である。レオンをはじめほかの関係僚は、すでにこちらに向かっていた。私はこの会議でも、刑法によってピケを取り締まる必要性を繰り返した。レオンも今回の成り行きに危惧を抱いていた。

ピケ隊の数が限度を超えた場合に彼らを押し戻し解散させる権限も含めて、警察はすでに必要な権限をすべて備えているというのが彼の見解で、その点を明確に国民に訴えるつもりだという。とはいえ、内相として警察に与えられる指示にも、憲法上の制約がある。そこで、マイケル・ヘイヴァーズ〔法務総裁〕が法的立場を下院に説明することで、意見がまとまった。政府には暴徒に屈服する意思がないこと、また働く権利は守らなければならないと考えていることを、声高に、そして明確に国民に伝えなければならない。私はそう考えた。

(3000人の警察官ノッティンガムに結集)

大規模なピケは相変わらず続いていた。水曜日には、通常通りの操業をしている炭坑は、わずかに二十九カ所になってしまった。就業を望む労働者を保護するために、各地から警官が招集され、十七の管区から三千人が集まっていた。この時点では、暴力沙汰はノッティンガムシャーに集中していた。ヨークシャーから送り込まれた遊撃隊が、早急に勝利を確実にしようと激しい行動に出ていた。しかし、同地区の労働者は金曜日にスト投票を執行し、反対票が七三％という結果が出た。翌日には中部、北西部、北東部の炭鉱地帯でも投票が行われ、反対派が圧倒的な多数を占めた。投票者の総数は約七万人、そのうち操業を求めた票数は五万を超えた。

(スト反対投票上回る)

全体から見ればかなり早い時期ではあったが、これは今回のストライキの一つの転期であった。警察の大規模な出勤は大いに効果を上げ、スト反対の投票結果とあいまって、炭坑封鎖の動きを逆転させた。月曜の朝、ブリュッセルで開かれた欧州理事会に出席していた私のもとに、最新情報が電話で伝えられた。操業している炭坑は、金曜日にはわずか十一方所だった

が、それが四十四カ所に増加したという。スト中止の投票結果が出た地区では、大半の労働者が職場に戻った。過激分子は、警察がその勇気と有能ぶりを発揮したお陰で、自分たちの旗色が悪くなったことを悟り、以後は代弁者である労働党とともに、警察への誹謗作戦に力を入れるようになった。

（閣僚会議を招集）

NUM幹部が会合を開いた日に、私はストを監視し対応策を決定するための閣僚委員会の設置を内閣に伝えた。私が委員長を務めるつもりだった。もちろんウィリー・ホワイトローをその一員とし、めったにないことだが私が不在の折は代理を務めてもらうことにした。エネルギー相ピーター・ウォーカー、内相レオン・ブリタンは欠くことができなかった。問題が経済に重要な関係があるため、蔵相ナイジェル・ローソンは直接の関係者だった。しかも彼にはエネルギー相の経験もあった。ノーマン・テビット（貿易産業相）、トム・キング（雇用相）、ニック・リドリ（運輸相）は、いずれも明らかに何らかの貢献が期待できるメンバーだった。ストが産業に及ぼす影響を最小限に抑え、同情ストの拡大を阻止し、道路と鉄道による石炭輸送を確保することが、この委員会の狙いだった。スコットランドでは、炭鉱および警察の両方に関して、ジョージ・ヤンガー〔スコットランド相〕が責任をとっていた。この委員会には、これらすべての閣僚あるいはその代理人が必ず出席した。法律に関する問題が生じた際は、法務総裁のマイケル・ヘイヴァーズも参加した。

（信頼できるピーター・ウォーカー）

委員会はだいたい週に一度開かれたが、状況によっては、さらに頻繁に集まることもあった。実際には、あまり大きな会議になると能率が悪い場合もあり、問題が起きるたびに小規模の委員会を開いて、ピーター・ウォーカーと私で重要な決定を下したこともある。特に急を要する場合は、それが多かった。

とはいえ、この委員会の役割については、もっと幅広い観点から考える必要があった。すなわち、ストにおいて政府が果たすべき役割とは何か、きちんとした枠を決めておかなければならなかった。ストへの対応責任は第一に、NCBおよびCEGB、BSC、ブリティッシュ・レール（BR＝英国鉄道）などの関連国有化産業の経営陣にあるという見解を、私は繰り返し主張してきた。国有化産業は、政府と法令が定めた予算と種々の制約のなかで経営されている。かといって今回のストのように、社会に深刻な影響が予想される場合は、責任感を備えた政府であれば、「手をこまねいて」傍観しては行かない。一つ間違えば、国の経済が危うくなる。そこで、経営陣の判断を尊重した上で、財政的あるいは政治的に政府が何を受け入れ、何を受け入れられないかを、明確に示すように心がけた。こうした政府のやり方を、野党は介入のし過ぎと解釈すべきか、それとも介入が少な過ぎるととるべきか、最後まで決めかねたらしい。彼らのどっちつかずの姿勢とスト解決に成功した事実を考えると、われわれはきわどいところで、微妙なバランスを正しく保持することができたと解釈していいのだろう。

（警察と裁判所との関係）

さらに細心の配慮を要したのは、警察および裁判所との関係である。イギリスには国家警察という組織はない。警察は五十二の地区単位で組織されており、それぞれを警察長が指揮している。監督権限は内務省、地区警察（地方議会議員と治安判事からなっている）、警察長の

三者が分担している。炭鉱ストでは当然のことながら、この三部構成の制度は、かなりの緊張を強いられた。法の秩序に対する今回のような大規模な暴力による挑発は、いうまでもなく全国レベルで、速やかにまた効率よく対処する必要があった。そこで1972年に発足したナショナル・リポーティング・センター（NRC）が、スコットランド・ヤードで活動を開始し、一九六四年に定められた警察法の「相互支援」規定にもとづいて、情報をプールしたり、管区間の協力活動を調整するのに一役買った。労働党からあれこれと欠点をヒステリックにい立てられたが、この三部体制は、うまく機能を果たした。確かに、余分の費用をどう捻出するかという問題も起きたが、国庫金への負担を増やすというやり方でそれは解決された。

（警察を全面支援するサッチャー）

暴徒の制圧は、政府が精神的にも物質的にも警察を完全に支援しなければ不可能である。われわれは、政治家が警察の足を引っ張るような真似はいっさいしないと、はっきりと伝えていた。一九八一年に起きた都市中心部での暴動を教訓に、警察にはすでに必要な装備と十分な訓練がなされていた。最近では八年十一月に、ウォーリントンにあるエディー・シヤーの新聞が、ナショナル・グラフィック・アーティスト組合（NGA）のピケ隊を装った暴徒に封鎖されそうになった事件があり、警察はこれを見事に阻止した。その際警察は、出社を望む従業員を数の力で阻止するようなことはさせないと、断固とした懸度を示した。またはじめて効果的な実力行使を行い、ピケ隊が目的地に近づく前にこれを押し戻し、混乱を防いでいる。

（警察の実力行使の法的根拠）

警察が力を存分に発揮するには、法律が明解であることも必要条件である。ストの初期の段階で、マイケル・ヘイヴァーズは、大規模ピケに対する警察の実力行使の範囲について、書面ではっきりと下院に伝えている。それには先にあげたような、乱闘が十分予想される場合に、現場に向かうピケ隊を阻止する権限も含まれていた。このようなコモン・ロー〔判例法〕にもとづいた権限は、労働組合法の制定よりもずっと歴史が長く、民法よりも刑法上の問題だった。ストライキの第二週日、この権限についてNUMケント支部が提訴したが、敗訴に終わっている。就業を望む労働者の威嚇を目指す、大規模ピケ隊を防止できるかどうかは、紛争の結果に重大な影響を及ぼした。

（政府と裁判所との関係）

政府と法廷の関係は、むしろ警察との関係よりも微妙だった。国民がこの点について強い警戒心を抱いていたのは、当然である。法廷の管理が政府の責任の範疇に入るのは道理としても、司法権の独立は、大憲章にうたわれた大原則である。暴力事件の数が増えるにつれて、裁判にかけられ有罪判決を受ける者がほとんどいないという実情に、われわれは強い懸念をもつようになった。法による取り締まりを定着させるには、ストの渦中で行われた明らかな犯罪行為を、すみやかに処罰するのが肝要だ。法が正しく機能している事実を国民に示さなければならない。

（ストに同情する一部法務官）

処理の遅れている事件が次第に山積みになっていた。被告とその弁護士の遅延作戦の成果でもあったが、ストライキ参加者に同情する地域の法務官の妨害も、原因の一つだった。訴訟の増加は、司法制度そのものにも急激な負担をかけることになった。そこで建物をいくつか確保して場所を用意し、有給の専門治安判事〔軽い犯罪を担当する判事〕の応援を依頼した。その結果たまっていた書類の山も、しだいに低くなっていった。

（投石に悩む警察官）

専門の治安判事は本業でない人々に比較すると仕事が速かったが、大法官が動けるのは、応援の要請があってからであって、依頼もないのに有給治安判事を任命する権限はない。もう一つの問題は、警官は降り注ぐ石のつぶてをはじめ、さまざまな攻撃から身を守るのに忙しく、細かい証拠をそろえる時間がないことだった。したがって事件の立証は難しかった。結局、多くの者が暴力行為を犯しながら、処罰を免れてしまった。

（スカーギル、大半の炭鉱を支配）

三月の最終週に入ると、状況はかなり明確に見えてきた。ストが早急に解決する気配はなかった。スカーギル氏とその一派は、大半の炭鉱をしっかりと掌握しており、簡単にはその砦を破れそうになかった。ところで、政府は過去二年間をかけてストライキ対策を練ってきたが、それには、スト開始後も石炭の採掘が多少なりとも行われる、という甘い予測はいっさい含まれていなかった。ところが重要な炭田地帯は相変わらず操業を続けていた。その石炭を発電所に搬入できれば、持久限界はぐつと伸びるだろう。この計算は、われわれの作戦に計り知れない好影響を与えた。どんなことがあっても、石炭の利用と運搬にかかわる労働組合に、結束して反旗を翻すようなことをさせてはならなかった。そのためには民法を適用する場面とタイミングに、細心の注意を払わなければならない。そこでNCBは民法にもとづく行動を、中止はしなかったものの延期した。

（スカーギル、スト権確立必要投票率を下げる）

スカーギル氏はストに入る前、できる限りスト権投票を回避しようと苦心していた。が、その可能性を残しておきたいと願っているのは、十分推察できた。実際、翌月にはNUMの特別代議員会議を開き、スト突入に必要な賛成多数の割合を、従来の五五%から五〇%に下げている。ストが始まった当初、われわれはNUMの穏健派が、スト権投票の実施に成功するよう願っていた。そうなった場合、政府の姿勢に好感を抱く労働者の数が過半数を超えるようにすることが、さらに重要になってくる。スト反対の声の多くは、投票の機会を奪われた怒りから生じているように思われた。ストライキの渦中、しかも感情が高まった時期に投票を行った場合、結果がスカーギル氏にとって吉と出るのか、それとも凶か、まったく予測がつかなかった。

（トラック運転手組合、断固としてスト妨害反対）

NUMの執行部は、鉄道やトラックあるいは船による石炭の輸送を阻止しようと、必死になっていた。そのため港で混乱が生じ、鉄道輸送が遅れるなど、彼らの小さな勝利が見られ

た。しかしトラックの運転手は、港湾労働者その他による威嚇、妨害を断固としてはねつけた。発電所およびほかの主要需要産業へのトラック業者による運送量はしだいに増加し、われわれの予測を上回る伸び率を示した。

（鉄鋼労組、同情スト拒否）

鉄鋼労働者は、自分たちの惨憺たる長いストを乗り越えてきたばかりだった。したがってNUMへの単なる同情ストで、工場が破壊され職場を失う危険を冒す気持ちはなかった。それも、自分たちのストには、ろくに関心も払ってくれなかったNUMのためになど。

（発電所組合、同情ストせず）

鍵を握っていたのは発電所の労働者である。彼らがストに入るか、あるいは炭鉱労働者を支援するために、火力発電を最大限に利用しようというわれわれの意図を妨害していたら、政府は大きな苦境に立たされていたに違いない。しかし、発電所の労働者はストに同調する意思はなく、イギリスの国民に光と電気を送るのが自分たちの役目だという、はっきりした態度をとった。指導者層も、ほかの労働組合の親玉から威嚇されたからといって、基本的に賛成できない行動に加わる気はまったくなかった。

すべてが持久限界を最大限に引き伸ばす方向に動いていた。私は週一度送られてくる、エネルギー省の状況報告に、綿密に目を通した。ストライキの初期、発電所が消費していた石炭は、週に百七十万トンだったが、多少とも石炭の供給が続いていたので、備蓄はそれほど減少してはいなかった。CEGBは持久限界を約六カ月と見ていた。しかし、これは石油発電を最大限に組み込んだ、つまり石油を燃料とする発電所をフル操業させた上での数字である。しかし、まだその段階には入っていなかった。いつ石油発電所の全面操業に入るか、そのタイミングが難しかった。NUM執行部が、それを挑発ととるのは目に見えていたからである。そこで、NUMの穏健派がスト投票を強行する見込みがある間は我慢していた。しかし、三月二十六日月曜日、私は火中の栗を拾う決心をした。

（英国鉄鋼、石炭不足を極度に心配）

産業用の石炭備蓄は、いうまでもなく発電用のそれよりはずっと少なかった。特に深刻な影響が心配されたのはセメント業界である。しかし、いちばん切迫した状態に追い込まれていたのはBSCだった。コークスと石炭の供給が途絶えてしまったら、レッドカーとスカンソープの一貫製鉄プラントは、二週間以内に閉鎖を余儀なくされる。ポートタルポットとレイヴェンスクレイグ、ランワーンの在庫もせいぜい三〜五週間分。日々変化する状況に、BSCがひどく神経質になったのも無理はない。

（鉄道労組と海運労組、炭鉱スト支援を約束）

ストが始まった三月の末は、このようにすべてが不確定の状態であった。ただ一つ疑いの余地がなかったのは、スカーギル氏の意図だけだった。三月二十八日、スカーギル氏は「モーニング・スター」紙にこう書いている。「NUMがいま行っているのは、社会的、産業的な“イギリスの戦い”である……早急に必要なのは、労働組合と労働運動の、速やかな、そして全面的な動員である」。スカーギル氏がそれを確保できるかどうかは、依然として読めなかった。

四月も膠着状態が続いた。全国ストの是非を問う投票が行われる可能性がまだ消えてはおらず、その結果がどうなるかも、まったくわからなかった。しかし現場では、強硬なピケにもかかわらず、職場に戻ろうとする気配が、とくにランカシャーなどに目立ってきた。とはいえ、それはまだ、あくまで気配にすぎなかった。鉄道労組と海運労組の指導者は、炭鉱労働者の支援を約束した。

（コークス運送業者二社、営業妨害の嫌でNUMサウスウエールズ支部を告訴）

そのような声はスト中何度となく開かれたが、一般の組合員はそれほど熱心ではなかった。ついにNUMに対する最初の告訴が行われた。コークスの運送業者二社が、ポートタルボット製鉄所でピケを張ったNUMサウスウエールズ支部を訴えたのである。

ストが始まった当初から、NCBの広報の手際が悪く、その方針や考えが従業員と一般大衆にうまく伝わっていないという感じがしていた。とはいえ、それは政府が代わられる仕事ではなかった。ただ後には、もう少しやり方を改善するように圧力はかけている。しかし、法律をかざして紛争に対処するという段階になれば、話をするのはわれわれの役目であり、政府はそれを声を大にして行った。四月九日「パノラマ」で、サー・ロビン・デイのインタビューを受けた時、私は警察のやり方を強く弁護した。

警察が守ろうとしているのは法律であって、政府ではありません。今回の紛争は炭鉱労働者と政府の問題ではなく、炭鉱労働者間の争いです。…法律を擁護する任務は警察にあります。…警察は立派にその責務を果たしています。

（リビア大使館からの発砲、婦人警察官射殺さる）

数日後警察は、また新たな前線に出動した。四月十七日、婦人警官のイボンヌ・フレッチャーが殺された。

平和的なデモ行進の警備に当たっていた時、セント・ジェームズ広場にあるリビア大使館から発砲された機関銃に撃たれたのである。国中に衝撃が走った。にもかかわらずスカーギル氏は、リビアの高官と接触していた。NUMの幹部は、ストライキの資金援助を求めて、カダフィ大佐と会見までしていたのだ。これら別々の不穏分子の組織の間には理解に苦しむ結びつきがあったようだ。

長い忍耐

（スト以来最初の会合、打開策見えず決裂）

五月に入り、NCBとNUMの幹部は、ストに突入以来はじめて会合をもった。それは短いものだったが意味は大きい。五月二十三日水曜日のことである。翌日詳細な報告が、私のもとに届いた。スカーギル氏は、NUM幹部の誰にも口を挟ませず、一切を取り仕切ったという。明らかにほかの幹部は、発言しないようにいい含められていた。NCBは石炭市場の展望、および炭坑の物理的な状況の二点について説明を行った。

炭坑のなかには、ストライキのために保安管理が行き届かず、採掘できなくなる個所も出て

いたのである。

NCBの説明に付し、NUMの代表者は質問やコメントを断り、その後でスカーギル氏が用意してきた声明を発表した。埋蔵石炭の枯渇という理由以外の炭坑閉鎖は、討議する必要がない。採算性の観点からの閉鎖など問外である、とその口調は激しかった。これに対しイアン・マクレガーは、それ以上話し合いを続けても無益だという意味の短い発言をした。しかしそういいながらも、NCBとNUMの幹部それぞれ二名ずつによる討議の継続を提案した。ところがスカーギル氏は、閉山計画を全面的に撤回しない限り、これ以上話し合いには応じられないと、強硬な姿勢を崩さなかった。

(スカーギル、マクレガーに罍を仕掛ける)

会合は終わりを告げた。ところがその時点でNUMは、罍を仕掛けたのである。それまで会合が行われていた部屋に少し残って内密の相談をしてもいいか という彼らの言葉に、裏があるとは考えなかったイアン・マクレガーは快く応じた。そのためNCBの代表は、部屋を出ていった。だが、どういいくるめたのか知らないが、NUMはそれをNCB側の「抗議の退場」としてマスコミに売り込んだ。国民の多くはそれを聞いて、イアン・マクレガーが話し合いを歓迎していない証拠ととらえた。スカーギル氏のような連中を相手にした場合陥りやすい危険の、典型的な例である。

(ピケ隊と5000人の警察官の激突)

一週一週と、ストは泥沼化していった。多くの炭鉱労働者が当初のような熱意を失い、発電所の持久力は大したことはないとするスカーギル氏の予想に、疑問を抱くようになった。そこでNUMの指導層は、ピケ隊員に対する手当を増やし——ストライキはしてもピケに参加しない労働者には、スト手当はまったく支払われなかった——非炭鉱労働者までかき集めて送り込み、全般的に暴力行為をエスカレートさせていった。

目標を定め、最短の予告期間で、大量のピケ隊をそこに集中投入しあつといわせる、というのが明らかに彼らの選んだ作戦だった。暴力事件でもっともショックだったのは、オールグリーヴ・コーク・ワークス社の門前で起きた、スカンソープ製鉄所向けのコークス輸送トラック部隊の妨害事件である。五月二十九日火曜日} 五千人を超すピケ隊員が警官と激突し、レンガや投げ矢をはじめ、ありとあらゆる物が警官に向かって投げつけられ、六十九人が負傷した。何百万人の国民とともに、私もその光景をテレビで見つめていた。まだしも幸いだったのは、これらの負傷者が、暴動鎮圧用の装備をつけていたことだった。

(サッチャーの抗議演説)

翌日バンパリーで行った演説で、私は次のように訴えた。

昨夜の事件は皆さんもテレビでご覧になったでしょう。いま行われているのは、法の支配に代えて、暴徒による支配をもち込もうとする行為です。これは絶対に成功させてはなりません。自分の意思に従わない相手を、暴力と脅迫で強要する一派がありますが、彼らは二つの理由から失敗するでしょう。第一には、優秀な警察が控えているからです。警官はよく訓練され、勇敢かつ公平に任務を遂行しています。

第二は、国民の圧倒的多数が、立派な人格を備え法律を順守する、尊敬すべき人々である

からです。こうした人々は、法律の順守を望み、威嚇には屈しません。ピケラインを突破して戦場に赴く人々の勇気には、心からの賛辞を贈ります。……法による支配は暴力による支配に、必ず打ち勝ちます。

次の三週間、オールグリーヴではさらに何回かの衝突が見られた。しかし、ピケ隊はついにトラック部隊の追い出しに成功しなかった。この事件は社会に大きな衝撃を与え、世論が炭鉱労働者に背を向ける大きな原因になった。

（反スト組家族に対する脅迫）

炭鉱地帯で大規模な脅迫が行われたという明確な証拠がはじめて手に入ったのは、この頃である。ストが長引くにつれて、脅迫はどんどんエスカレートしていった。労働者本人にとどまらず、妻や子供たちまでが危険にさらされていた。あまりの悪辣さに、そのニュースは、炭鉱労働者社会の精神がどうのこうのという、ロマンティックな論議が、すぐれた解毒剤の役を果たした。脅迫はその性質上、警察がとりわけ取り締まりに苦慮する。しかしまもなく、制服と私服のチームが、その撲滅のために各地に配備された。

われわれが改革した労働組合法は、民法による解決の道を用意していたが、国有化産業はそれをうまく活用せず、国民から多くの批判の声が上がっていた。ピケ隊の暴力行為は収まる様子もなく、しかもBSCへのストの影響が深刻になってきた。そのため、関係閣僚は再三会議を開き、NUMおよび支援活動を行ったほかの労働組合に対し民法上の責任を追及するよう奨励すべきかどうか、討議を繰り返した。労働組合とその資金に関して民事訴訟を行わないとすると、刑法とそれを守るのが役目の警察の肩に、すべてがかかってしまう。一方、労組資金に法的措置を講じることができれば、大量のピケ隊員の維持が難しくなり、暴力や脅迫が減るのではないか、という声も聞かれた。われわれがせっかく行った労働組合改革も、問題解決のために用意された法律を国営企業が利用しなければ信用がなくなってしまうと、公然と嘯く声もあった。私のアドバイザーと同様、私もその意見には大いに共感を覚えた。

（サッチャー法、生かされず）

しかしピーター・ウォーカーは、民事訴訟をすれば、こちらを向いていた炭鉱労働者と穏健な労働組合員の気持ちの離反する恐れがあると主張した。BSC、NCB、BR、CEGBの総裁も、少なくとも当面はその危険があるといって、ウォーカーに同調した。彼らは六月末に会議を開き、あらゆる状況から見て、差止命令は時期尚早との結論を出した。警察も、民法による措置で自分たちの仕事が楽になるとは確信していなかった。だからといって、経営者やストに参加しない労働者などが、新しい組合法を利用しなかったわけではない。実は紛争の間、ピケ隊とその指導者がばかにしているのは「サッチャーの法律」、すなわち新しい組合法ではなく、むしろ国の基本的な刑法だったという点は大いに強調されなければならないというのが事実であった。

その日はピーター・ウォーカーの意見に従うこととなり、NCBは民事訴訟という手だてをとらずストに勝ち抜く努力を続けた。ある意味では、結果が方策を正当化したといえるだろう。しかし、NUMの規模な抵抗を受けたとしても、組合資金の仮差し押さえという手続きを踏んでいたら、もっと早期に同じ結果を得ることができただろうか。「あるいはそうなったかも知れない」といった論議に、答えを出すのは不可能である。しかし振り返ってみると、国

営企業にもっと早い時期に行動を起こすよう促してもよかった、という気もする。炭鉱労働者が実際に自分たちの意思で立ち上がった時 — もっとも望ましい解決法とは思っていたが、政府としてはそれを当てにするわけにはいかなかった — それはスカーギル氏に強烈な打撃を与え、NUMはストの継続が難しくなった。しかし、以来「サッチャー法」の活用は、イギリスの労使問題解決の基準となり、お陰でストや労使紛争が一気に減少した。

（夏季休業による炭鉱の一時的休業の影響）

一方、操業を再開した炭坑の数や労働者の数の変化にも、細かい注意が払われた。七月、八月は例年通り夏の休暇をとる者が多く、多数の炭坑が休業した。休暇が終われば大々的に復帰するのではないかという希望もあったが、半面、夏前には操業していた炭坑が、ピケ隊の新たな戦力補充によって、再開を阻まれる恐れもあった。ストライキのために労働者本人はもちろん家族も含めて、経済的損失をどの程度こうむったのか、その点も先行きを予測する上で、一つのポイントとなった。しかしそれより重要だったのは、労働者の心理だろう。休暇後本当に大規模な職場復帰が行われれば、それが大きな弾みとなることが期待できた。

一方スカーギル氏の方は、秋が近づけば、冬場の電力制限をよしとしない政府の指導でNCBは譲歩せざるを得なくなると、仲間を説得するものと思われた。

したがって、いうまでもないことだが、ストから抜け出し仕事に戻ろうかと気持ちが揺れている労働者に、何とかしてこちらの真意を理解してもらうことが、NCBの重要な仕事になってきた。そこで私の勧めにより、ティム・ベルがマクレガー氏の助言役についた。ティムはこれまで私の発言に、多くの有益な助言を与えてくれた人物である。実際NCBの再建計画には、大いに売り込んでしかるべき積極策も含まれていた。

（ストにより坑道の荒廃、顧客の喪失の心配）

まずストで延期になっているものの、新たな大規模投資が期待できた。また操業が再開されれば、給与の引き上げがあるはずだった。しかし、いい話ばかりではない。ストにより坑道が荒廃し、操業の再開が不可能になる恐れもあった。顧客も失われた。おそらく二度と戻ってこないだろう。補助金につられて燃料を石炭に変更した企業も、今後は石炭の供給にあまり信頼をおかないだろう。ストライキの最中に、採算がとれないという理由で炭坑を閉鎖してしまうことも不可能ではなかった。実際それを討議したこともある。しかし、穏健派を敵に回す危険の方が大きい、という結論に落ち着いた。今回の希望退職の条件は、前例のないほど割りがよい。だからといって、より多くの労働者に離職を奨励していいかどうかという点も、考えなければならなかった。人員整理には二つの問題が予想された。第一に、大量の退職希望者が出たとしても、それが閉鎖が必要だった炭坑から出るという保証がまったくないこと、第二に、これは実際にその危険があったのだが、退職にもっともひかれるのは、暴力ざたと脅迫にうんざりした穏健派の労働者で、その結果地域によっては、あるいは全国的に見ても、過半数が強硬論者になってしまう恐れがあった。そこで、この点でも消極的な結論に達したのである。

（TGWU、NUM支援全国港湾スト宣言）

七月は最悪の月となった。九日月曜日、全国港湾労働制度（NDLS）に違反する行為があるとして、運輸一般労働組合（TGWU）が突如全国港湾ストを宣言したのである。NDLSは、

港湾における日雇い労働を排除する目的で、アトリー政権によって設立された。法令にもとづき、イギリスの港の大半はこの制度に従って運営されていた。その結果クロード・ショップ制が敷かれ、港湾労働者組合は、まれにみる力をもつようになった。ストを打つ理由としてあげられたのは、BSCがイミンガムのドックに備蓄されていた鉄鉱石を、陸路スカンソープの製鉄所に臨時労働者を使って輸送しようとしたからである。実際BSC側は、NDLSと地域協約に違反していないという確信があった。NDISのばかげた規定に従って、臨時労働者が作業を行う場合は、登録港湾労働者が作業をしたことにするため、登録港湾労働者の立ち会いが必要とされていた。BSCは「正しく」これを順守していた。政府は、組合の代表も入っている全国港湾労働委員会が、この旨の判断を早く下すことを期待していた。しかし、TGWUの指導者は、スカーギル支援を固く決意しており、ストの口実が見つかったとあからさまに喜んでた。

われわれはすでに一九八二年に起きた全国港湾ストの影響や背後関係を、広範囲にわたって調査していた。

今回のストで大きな影響を受けるのは、NDLSに加盟している港に限られ、炭鉱ストの成り行きに直接的な影響はほとんどないと思われた。発電用に石炭を輸入するつもりはなかった。労働者の反感を買う危険があったからである。しかし、港湾ストで石炭と鉄鉱石の輸入がストップすれば、BSCに深刻な影響が出る心配があった。

（しっぺ返しによるスト支援）

実際今回の港湾ストは主に、主要製鉄所に対する圧力を強めて、側面から炭鉱ストを支援しようという、TGWU執行部左派の画策と考えられた。BSCがトラック捨送網を整備し、鉄道輸送への妨害をうまく回避したことへの、しっぺがえしである。ばら積みでない貨物の三分之一が、荷を積んだトラックをそのまま乗せる貨物船で輸送されており、その多くは運転手付きで、ドーヴァーやフェリクストウなど非NDLS港を経由していたとはいえ、港湾ストがもたらす貿易全般、特に食料への深刻な影響が心配された。すべてはこのストがどの程度支持されるか、NDLS加盟港だけにとどまるか、という点にかかっていた。

炭鉱ストに関する定例閣僚会議は、結局二つのストに対処しなければならなくなった。港湾ストが始まった日、私は委員会で、四十八時間以内に世論を動かすよう、集中的に努力することが急務だと訴えた。まず港湾労働者の雇用主には、決然とした姿勢で対処し、あらゆる手だてを講じて、ストの被害が予測される業界の労働者、ひいては社会全体にスト反対の声を盛り上げるよう、要請する必要がある。ストの口実とされた件は真実ではなく、今回行動を起こしたグループがすでに例外的ともいえる特権を享受している事実を、明確に国民に説明する必要もあった。また、NDISに登録している労働者一万三千人のうち四千人が余剰労働力と推定されている事実も、訴えなければならなかった。もちろん、炭鉱ストの渦中にあるいまは、NDLSの撤廃を論議すべき時期でなかった。しかし、将来の変革の足かせにならないよう、解決を図らねばならない。そこで機動隊を動員し、危機に備えた。ただし、非常事態の宣言は避けた。軍隊の出動を示唆する恐れがあったからである。少しでも過剰反応という印象を与えたら、炭鉱労働者をはじめほかの労働組合の闘志を刺激してしまう。炭鉱ストの解決に十分時間をかけることができるように、できる限り短期間で港湾ストをつぶす、それがわれわれの作戦だった。

（弱気になった全国海運評議会）

当初港湾ストは、解決に苦労しそうだという印象を与えた。七月十六日月曜日、全国海運評議会の昼食会に出席したところ、会場は敗北主義のムードに包まれていた。すっかりなじみとなった光景である。企業の側は、問題が自分にかかわりがないと、いつも験しく対処するように助言をしていた。ところがいざ自分に火の粉が降りかかってくると、弱気になり、こんな大規模なストははじめてだといひ出すのである。

私はその夜、全体的な状況をもう一度見直すために、特別の閣僚会議を招集し、その席で種々の対策を検討した。ピケがNDLSに加盟していない港まで広がった場合、TGWUを提訴する方向で動く、そうなればNCBのNUMに対する差止命令を発動させる強力な根拠ができる、という点が一同により確認された。まさに紛争がエスカレートするかしらないかの瀬戸際のように思われた。

しかし、国民に対する状況説明を重視していた私は、一方で自ら先に立って、ストライキ中の政府声明を調整する機関として、関係各省の閣外相クラスからなるグループを結成した。リーダーは当時雇用相の地位にあったトム・キングである。ピーター・ウォーカーは、これを特に歓迎はしなかった。ウォーカーは、いつも秘密裡に行動することを好んでいた。確かに申し分ない成果を上げてはいたが、彼のやり方では、政府の部門によっては、われわれの意図について確信がもてなくなったり、適切な情報を欠いたりといった危険が生じる。しかし、この機関の設置は、結果的には大成功だった。この時だけは、政府のメンバーが全員、毎日声を揃えて何とか同じ歌を歌おうと努めたからである。

（10日間ストで終わった港湾スト）

結局、港湾ストは恐れていたほどの問題ではないことがわかった。指導者がどのような見解を抱いてしようと、一般の港湾労働者は、自分の職場が脅かされるようなストを支渡する気持ちにはなっていなかった。

NDLSに加盟している港湾の労働者でさえ、決して熱心とはいえなかった。ストライキがNDLSそのものの廃止を早めるのではないかと恐れたのだ。しかし決定的な役割を果たしたのは、トラックの運転手である。港湾労働者よりも積み荷の確保が直接大問題となる彼らは、威嚇や脅迫を受けて引き下がる気はなかった。七月二十日、TGWUは、スト中止宣言を余儀なくされた。わずか十日のストだった。

（NCBとNUMの会合決裂）

港湾ストの中止は、この当時起きた数々の重要な動きの一つにすぎない。五月二十三日に行われたNCBとNUMの会合は、実りなく終わったが、七月の初旬に再開された。今回は短期間で話し合いをまとめ、スカーギル氏の主張がいかにも不合理であるかを、NCBが世間に納得させるというのがわれわれの希望だった。

そうすれば、ストに参加している労働者が、勝ち目がないことを悟り戦場に復帰する可能催が出てくるだろう。

ところが会議はだらだらと続き、おまけにNCBが態度を軟化させる気配さえ見えてきた。一つの間連題は、交渉が新しいラウンドに入るたびに、当然のことながら労働者の職場復帰の意欲が薄れていったことだ。解決が近いとあれば、わざわざスト破りの危険を冒す者はあまり

いない。さらに憂慮されたのは、経済効率の悪い炭坑の閉鎖問題をいいかげんにごまかしたまま、会談が終わる危険が出てきたことである。「有益に開発する」ことが可能な限り炭坑を閉鎖しないという前提に立って、閉山問題を検討するという図式ができあがりつつあった。そのうえ、NUMが閉鎖を決定しているのではないかと疑った五つの炭坑について、NCBは操業の続行を確約する覚悟をしていた。大いに警戒すべき事態だった。これらの提案は細部の表現が曖昧だった。しかも（さらに悪いことには）、この線で話し合いが落ち着いた場合、スカーギルに勝利を宣言させるチャンスを与えてしまうだろう。

しかし港湾ストが終わる二日前の七月十八日、交渉は決裂した。私は正直なところほっとしたというのが事実である。

（三者会談；86年3月まで十分な貯炭あり、安堵）

一週間後、長いストのなかで私にとって非常に意味深い出来事があった。とはいえ、当時それはそれについて知る者はほとんどいなかった。七月二十五日水曜日、ピーター・ウォーカーおよびCEGB総裁のサー・ウォルター・マーシャルと、発電所の持久力について極秘の会議を開いたのである。まさにその日、私のもとには、形勢不利を憂えたノーマン・デビット〔貿易産業相〕の手紙が届いていた。一月半ばには石炭の備蓄が尽きるだろうという調査報告を見たノーマンは、もしその通りなら、秋までに決着をつけるように、早急に手だてを考えなければならぬと訴えてきた。限界ぎりぎりまでストを引きずるわけにはいかないと考えたのである。

ノーマンのいわんとしていることはよく理解できた。数字は当てにならないという彼の本能的な警戒心は私にもあり、そのうえピーターの楽観主義にも不安を感じていたので、ピーターとウォルター・マーシャルに会談を申し入れたわけである。その会談で二人の見解を開き、私はすっかり気持ちが明るくなった。ウォルター・マーシャルは先にウォーカーが伝えた現状評価が、間違っていないことを確認した。現在のレベルで、ノッティンガムシャーそのほかの炭鉱から供給が続けば、八五年の六月までは安全だという話だった。

CEGBは、実のところ八五年十一月までは、発電所は通常の機能を果たせると見ていた。マーシャルが示した表を見ると、石炭、原子力、石油による総合発電量は、夏期需要（低需要期）を、ほとんど完全に満たしていた。八六年の春まで持久限界を引き伸ばすことができれば――これはより多くの職場復帰を促せば、何とか実現できるかも知れなかった――その年の冬までもちこたえられるという見通しだった。

（貯炭確保は鉄道輸送次第、鉄道労組の要求は全て認める）

しかし、これらの予測はいずれも、ノッティンガムシャーからの供給量の変動に著しく左右される。まず同地の生産を確保することがカギだと、ウォルター・マーシャルは強調した。ノッティンガムシャーからの供給量が少しでも増えれば、発電所の持久力は大きく跳ね上がる。反対に少しでも不足すれば、持久限界は一挙に短くなってしまふ。となればノッティンガムシャーからの輸送路をどうしても確保しなければならない。トラック輸送は大きく貢献しているが、鉄道輸送も不可欠である。膨大な量の輸送が必要な上に、坑口に設けられた一時置き場は、比較的小さい所が多いという理由から、鉄道輸送は、「メリーゴーランド」方式、つまり石炭を満載した貨車が直接発電所の構内まで入り、その日のうちに戻ってくるというシステムがとられている。したがって鉄道組合員に操業をやめさせないことが肝要で、そのために

は、求められれば賃上げ交渉での譲歩もやむを得ないと考えた。

(ノッティンガム炭鉱労働者に気を使うサッチャー)

ウォルター・マーンヤルは、発電用石炭の輸入は好ましくないという考えにも賛成を示した。そんなことをすれば、現在操業をしているノッティンガムシヤアの炭鉱労働者も、気分を害すだろう。輸入はほかの産業向けのものに限り、CEGBを紛争に巻き込まないようにした方がよい。ウォルター・マーンヤルはそう語った。また長期的な計画としては、持久力を現在の六ヵ月から少なくとも一年に伸ばすことを提案した。いまのストが解決したとしても、次がないとはいえないからである。

天性の陽気な性格に加えて、状況を細部までしっかりと把握し、しかも電力の供給カットは何としても避けるという決然とした態度を示すウォルター・マーンヤルに、私は気持ちがすっかり軽くなった。その後数日の間に、ノーマン・テビットをはじめ何人かの閣僚と個別に面談し、私は状況を説明した。お陰で全員が、それまでの予想以上に明るい気分で休暇を迎えることができた。

七月三十一日下院で、労働党が浅はかにも上程した議責動議に対する答弁を行った。討議は炭鉱ストに限らなかったが、この問題は誰もが関心をもっており、当然国民の注目を集めた。私は歯に衣着せず、自分の考えを述べた。

労働党は、ストライキとあれば、その根拠が何であろうと、どれほど被害をもたらそうと、一切構わず支援する政党です。とりわけ見逃してはならないのは、わが国の働く人々の真の利益を代表するといいつながら、スト中の炭鉱労働者をけしかけて、ストに参加しないほかの労働者を攻撃させるという、自らの主張を完全に汚してしまった行為であります。

(痛烈なキノック労働党首批判)

ニール・キノックについても、言葉を惜しまなかった。

野党の党首ニール・キノックは、NUMがスト実施に必要な投票の割合を従来の規約の数字から下げるまで、一切スト投票については口を閉じていました。そして規約の変更が決まると、全国投票が間もなく行われるのは間違いないだろうと下院で語りました。それは四月十二日の出来事です。以来彼の口からスト投票については、一切聞かれていません。ところが七月十四日にNUMの集会に出席した彼は、「闘う意外に道はない、ほかの道はすべて閉ざされた」と語っています。スト投票は、どうなってしまったのでしょうか。

これについてニール・キノックからの答えはまったくなかった。

(キノックは信用できない)

ニール・キノックは、一九八三年十月、労働党党首としてマイケル・フットの後任者になった。私は下院のディスパッチ・ボックス〔宣誓用の聖書などを入れておく箱〕越しに七年間彼と顔を合わせた。マイケル・フットのように、彼は天性の弁舌家だった。しかし、フット氏と違い、彼は議会人ではなかった。彼の下院における出来栄は、冗長さ、事実をつかめないこと、技術的な議論、そして何よりも知的明快さの欠如によって損なわれていた。最後の欠点は、さらに深いものを反映していた。キノック氏は100%近代労働党の所産だった。左翼で、労働組合に近く、党運営と政治的操作に巧みで、労働党の過去の欠陥は政策の失敗というより、提示の仕方が下手だった結果だと信じていた。彼は、演説であれ、党声明や政策報告の

文書であれ、言葉というものは、ほかの人々を社会主義に改宗させるより、自分自身や労働党の社会主義を隠すための手段だとみなしていた。したがって、彼は力強く、時には勇敢にトロッキー主義者やほかの左翼のトラブルメーカーを攻撃した。彼らの残酷な戦術あるいは極端に革命的な目標のゆえにではなく、彼や労働党の野望にとって困惑を起こさせるものだったからである。私がよく覚えているように、野党の党首であることはやさしい仕事ではない。野党としての労働党の党首であることは悪夢であるに違いない。しかし、私はキノック氏に同情することは難しいことがわかった。彼は私にとっては基本的に信用することのできないことを行っていた。彼自身と労働党を実際とは別のものに見せようとしていたことだ。下院と有権者は、彼の正体を見破っていた。野党党首として、彼は力不足だった。首相としては、落第だっただろう。

（2人の炭坑労働者、NUMヨークを提訴）

八月に入ると、ストライキの最悪の時期は終わったと思える根拠がいくつか見られるようになった。スカーギル氏と戦闘的な一派は次第に孤立し、挫折感を強めていた。港湾ストは失敗した。政府とNCBの姿勢は、一般的に以前より共感をもって迎えられており、労働党は混乱を極めていた。職場に戻った労働者の数は、七月は五百人とまだごくわずかだったが、操業中の炭鉱がピケ隊に屈する気配はまったくなかった。そして八月七日、ついにヨークシャーの二人の労働者が、NUMヨークシャー支部を投票なしでストに突入したとして、高等法院に告訴した。これは有意義な提訴で、ついにはNUMの全資産の仮差し押さえに発展した。

（ダービーシャー、スト派と反スト派と深刻な対立）

組合活動家の欲求不満は、スト不参加の労働者およびその家族に対する暴力行為の増加という形で表れた。ノッティンガムシャーは秩序が守られ平穏だったが、ダービーシャーでは、事態が悪化していた。一つにはダービーシャーの方が分裂が深く、また一つには、遊撃ピケ隊の主な基点となっていたヨークシャーの炭田地帯に近かったことが、理由だろう。マクレガー氏は首相官邸や内務省とたえず連絡をとっていた。マクレガー氏は、脅迫行為そのものを遺憾に思うばかりではなく、それによって労働者の職場復帰が遅れることを懸念していた。それに現在働いている労働者が、脅かされて職場を捨てる危険もある。

（警察官、ダービーシャー労働者を保護）

警察は、NUMが戦術を変えたのではないかと見ていた。大規模ピケの失敗で焦り、個人や企業への威嚇を中心にしたゲリラ戦法に切り替えたと考えたのである。そこでダービーシャーの炭鉱労働者の保護に積極的に乗り出した。警察への“ホットライン”も設けられ、多数の刑事が脅迫取り締まりに投入された。制服姿の警官が村々をパトロールする光景も見られるようになった。

（2回目の全国港湾スト宣言）

一方では港湾ストの再発の兆候があった。BSCのレイヴェンスクレイグ製鉄所向けの石炭が荷揚げされるスコットランドの深水港、ハンターストーン港で小競り合いが起きていた。レイヴェンスタレイグのコークス炉に欠かせない種類の石炭が、当時ベルファスト入江に停泊していた貨物船「オスティア」に積まれていた。早急にその石炭を荷揚げしないと、レイヴェンスクレイグ製鉄所は操業短縮に追い込まれると、BSCは焦っていた。溶鉱炉はいったん火を消し

てしまうと、取り返しのつかないほど痛んでしまう。したがって石炭の供給がとだえたら、この製鉄所は永久に閉鎖を余儀なくされるだろう。前回の港湾ストと同じく、口実となったのはばかげた規約だった。ハンターストーンではBSC向けの石炭の荷下ろし作業は、船上ではTGWUの組合員が、陸上では鉄鋼労働組合（ISTC）の組合員が行うのが、慣行になっていた。しかし「オスティア」の積み荷の90%は、船倉内の荷繰りをしなくても下ろせた。そこでBSCは、自分の作業員を使ってやっつけてしまおうと考えた。だが、TGWUは、ストの口実が見つかったとばかり、全国港湾労働委員会の協約に反すると、横やりを入れそうな気配を見せた。BSCは、荷下ろしができなければ法廷に訴える覚悟であると、われわれに伝えてきた。

これはたいへん微妙な問題であり、ノーマン・テビットがBSCと密接な連絡をとった。全国港湾労働委員会は裁定を下すように求められたが、なかなか踏み切らず、結局は逃げてしまった。八月十七日、BSCはレイヴェンスタレイグの操業短縮に踏み切った。石炭の荷下ろしを同月の二十三日から二十四日までに行わなければ二十八日から二十九日には溶鉱炉の火を“埋め火”にしなければならない——つまり溶鉱炉の火だけを最小限に保ち、実際の作業は行わない状態——とのことだった。もしその後も石炭の供給がなければ、完全閉鎖になるだろう。

BSCはぎりぎりまで待ったが、結局八月二十三日木曜日、自分の作業員を使って「オスティア」からの荷下ろしに踏み切った。BSCは一九八四年に定められた、地域の港湾協定に従って行動していたが、TGWUの組合員は直ちに現場を引き揚げ、二回目の全国港湾ストが宣言された。

しかしスコットランドでは、レイヴェンスタレイグの将来を危うくするような行為は、どんなことでも世論の強い反発を招くのが常だった。したがって今回のストが、スコットランドの全地域、ましてやイギリス全体に広がるとは思えなかった。この観測は正しかったのである。今回のストは前回に比べ、はるかに威力の小さいものとなった。はじめのうちこそ組合員から相応の支持を受けたが、大多数の港はその機能を果たしていた。TGWUは結局、九月十八日にスト中止命令を出した。

八月九日から二十七日にかけてスイスとオーストリアで夏の休暇を過ごしていた私は、「オスティア」の件の推移をテレックスで追っていた。私が不在の間はピーター・ウォーカーが、炭鉱ストに対し日々の指揮をとり、成果をあげていた。しかし、首相には真の休暇はなかった。身の回りには、かつて私の個人秘書の一人だった駐オーストリア大使、二十四時間体制の五人の“ガーデン・ルームの女性たち”、首相官邸との通信を管理する専門家、それに交替で勤務するガードマンの姿があった。「外交文書郵便袋」には私宛ての緊急便があり、テレックスは一日中鳴っていた。いずれにしろ重要事項があれば、ウィリー・ホワイトローが電話をかけてくる。イーデン首相の夫人クラリッサはかつて、ダウニング街十番地の食堂に、スエズ運河が流れているような気が何度となくしたと語っていた。私の場合は、夕方窓から外を眺めていると、スイスの斜面を大股で歩いている、二、三人のヨークシャーの炭鉱労働者の姿が見えた。そして、美しい山の風景も、私の好きな読み物であるフレデリック・フォーサイスやジョン・ルカレのスリラー小説も、私の気をまぎらすことができなかったのである。

（逮捕者5897人）

帰国してみると、ただ一つの点を除いて、状況は出発した当時とさして変わっていなかつ

た。ところが、そのただ一つの相違が流れを決する意味をもっていたことが、後にわかった。暴力行為や脅迫は相変わらず行われていた。すでに逮捕者は五千八百九十七人に達し、そのうち一千三十九人の有罪が決定していた。もっとも重い刑は九カ月の投獄だった。ロザラムとドンカスターでは九月初旬から、はじめて有給治安判事が登場することになっていた。ほかの地域ではすでに体制が整っていた。労働党のエネルギー担当報道官のスタン・オームが、炭鉱ストの調停に乗り出してきた。それは問題の解決を早めるというよりも、労働党の面子の失墜を最小限に食い止めるのに役立った、といえるだろう。ロバート・マクスウェルも間に入ろうとしていた。九月のはじめ、彼は調停の労をとる気持ちがあると表明したが、双方が一度も会合を開かないうちに、非難の応酬ですべてはぶち壊しとなった。NUMはそれを政府の責任だと攻撃してきた。

勝つか負けるか。

（墓穴を掘ったNCB、NACODSに賃金カット警告）

しかし、この時期何よりも重要な影響をもたらしたのは、NCBが炭鉱職長・保安係・点火係全国協会（NACODS）のメンバーに向けて八月十五日に出した回状である。ふさわしい資格をもった保安要員が立ち会わない限り、石炭の採掘は法律によって禁止されている。この保安要員の大多数がNACODSのメンバーだった。四月にNACODSは、ストライキの是非を問う投票を行った。しかし、組合規約で定められている三分の二の賛成票を獲得できず、ストを実施できなかった。NCBは八月半ばまでは、NACODSに対し、地域によって異なる対応を見せていた。つまりある地域では、ストに入って炭鉱が操業していない場合、NACODSのメンバーはそこから離れることを許された。ところが別の地域では、ピケ・ラインを突破して坑内に入るよう求められたのである。今回のNCBの回状は、それをすべて後者に統一し、従わない場合は賃金をカットすることを伝えていた。

この回状でNCBは墓穴を掘ってしまった。NACODSの指導層、特にNUMを強く支持していた委員長は、ついにストを起す口実が見つかったと、これに飛びついた。NCBがなぜそのような行動に出たかは、理解に難くない。しかし、それは大きな誤りで、今回はストに傾いていたNACODS組合員の心理を見誤ったこととあいまって、事態の悪化を招いたといっていだろう。

（TUC大会で暴力者を排除しないキノック）

九月と十月は、いつも難問が生じる時期だったような気がする。電気の需要が頂点に達し、停電の可能性がもっとも期待できる冬の到来を、炭鉱労働者は待ちかねていた。九月はじめに行われた労働組合会議（TUC）大会で、過半数の労働組合が、電力発電関係の労働者の強い反対を無視して、炭鉱ストへの支援を呼びかけた。とはいえ、たいいていの組合は、自分から進んでそうするつもりはなかった。電力労働組合の指導者エリック・ハモンドは、率直にこの点を指摘し、力強い演説をしたが、激しい野次を浴びることになった。

ニール・キノックも演説を行っている。それまでになくはっきりと、ピケ隊の暴力を非難したが、かといって、それを支持する連中を党から追放することはしなかった。一方スカーギル氏は、採算のとれない炭坑などは存在しない、そう見えるのは資金が不足しているからにすぎないと、従来の見解を繰り返していた。

(NCBとNUM交渉再開)

NCBとNUMの交渉は九月九日から再開された。用語に関する議論が続き、一般大衆は両者の間でいったい何がそんなに問題になっているのか、理解に苦しんだ。イアン・マクレガーとNCBの代表が、ストの原因となった根本方針について、知らず知らずのうちに譲歩することがないように、私はたえず注意を払っていた。七月の会談でマクレガー氏はすでに、「採算のとれない」炭坑を閉鎖するという方針を、「有益な開発が」望めない炭坑へと、より曖昧な表現に変えていた。当時スカーギル氏にこの不明瞭な表現を受け入れる用意がなかったのは幸いだった。ピーター・ウォーカーと私は常々、NUM 指導者がいかに悪辣で冷酷な連中であるかを、イアン・マクレガーがよく理解していないと考えていた。彼は実業家であり、政治家ではなかった。理屈に合うかどうかということと、取り決めに達するという観点から物事を考えた。おそらく労働者を職場に戻せば、どんなに詳細な取り決めにしようとも、後はNCBの思うように立て直しができると考えていたのではないだろうか。しかし経験の長いほかの人々からすれば、アーサー・スカーギルとその一派がいずれまた難癖の種を見つけ出し、事態が振り出しに戻るのには、目に見えていた。石炭産業の将来、いやイギリスの将来のためにも、不採算の炭坑の閉鎖を認めないというNUMの要求を、何としても打ち砕き、彼らの敗北を見せつけ、政治目的のストは、永久に評価されなくなるようにすることがどうしても必要であった。

(「職場復帰を求める炭鉱労働者の妻の会」のメンバーと会見)

「職場復帰を求める炭鉱労働者の妻の会」のメンバーにはじめて会ったのも、九月だった。代表がダウニング街十番地に面会を求めてやって来たのである。婦人たちの勇気には、深く心を動かされた。家族が脅迫や誹諷にさらされているのに、こうして勇敢に戦っている。彼女たちの口から現場の状況を詳しく聞いたところ、NCBのスト対策について抱いていたいくつかの懸念が、現実であることが確認された。いまでも炭鉱労働者の大半は、NCBの提案した賃金制度と投資計画を完全には理解していないという。ストライキ中の労働者にもっとNCBの意図を明確に知らせる必要があった。彼らはもっぱらNUMが与える情報に頼っているのだ。NCBとNUMの交渉が行われている間、あるいはその予定がある限り、職場に復帰するよう労働者を説得するのは、たいへん難しいと、婦人たちは語った。炭鉱地帯の小さな商店は、ストに参加している労働者には食べ物や商品を売るが、仕事に出ている労働者には売らないよう脅迫されているという。しかし、彼女たちの訴えでもっともショックを受けたのは、NCBの地方支部のなかには、職場復帰の奨励に熱意のない管理職もあり、ある地域では、むしろ積極的にNUMの側に立ち、職場への復帰を阻害しているという話だった。石炭産業のように労働組合が力もち過ぎた産業では、あっても不思議ではない話である。

もちろんこうした婦人たちにとって何より必要なのは、スト中止の先頭に立っている労働者を必要とあれば組合闘士の少ない炭鉱に移し、希望退職の優先権を与えるなど、NCBが全力を尽くして守ってくれることだった。このまま放っておくようなことはしないと、私は婦人たちに約束した。この約束は守ったと思う。イギリスの国民は皆、これらの勇敢を婦人たちに恩を受けている。

(ケント州出身マッジボン夫人一家、スト組の襲撃受ける)

炭鉱労働者の妻の一人、ケント州からやってきたマッジボン夫人は、自身と家族に降りか

かった恐ろしい経験を、保守党大会で語ってくれた。ストを強行している連中の悪辣ぶりには際限がなかった。年端もいかない子供たちにまで手を伸ばし、パパとママを殺してやると脅したという。この大会の直後に「モーニング・スター」紙がマッキボン夫人の住所を載せてしまった。一週間後、夫人の家は攻撃を受けた。

（全国就労炭鉱労働者委員会の結成）

九月十一日全国就労炭鉱労働者委員会が結成された。これは仕事を続けてきた労働者にとって、重要な一步となった。私は友人のデービッド・ハートから非公式に、現地で何が起きているのかかなり詳しく報告を受けていた。デービッドは、仕事を続ける労働者を援助するために、大いに働いていた。私はできる限り、すべてのことを知りたかった。

（ヨーク大聖堂訪問）

九月二十六日水曜日、私はヨークへ出かけ、まず大聖堂を訪れた。大聖堂は最近落雷を受け、そのために起きた火事で大きな被害を受けていた。近頃英国国教会の神学理論がふらついているから、天罰が当たったのだという声も聞かれた。ヨークで、地元地域へのストの被害について、ヨークシャー警察や地元住民と話し合った。私はそれまで、NCBの広報活動が体をなしておらず、その意が十分労働者に伝わっていないのではないかと懸念していたが、それが間違っていなかったことが、保守党の活動家との昼食会でよくわかった。この昼食会にはバーズリーからの出席者も含まれていた。脅迫については、すでに十分過ぎるほど伝えられていたが、それでも新しい話がいろいろ聞かれた。そのうえ、スカーギル氏のひどい仕打ちが支持者である労働者にもたらしている、経済的な苦境にも疑いはなかった。炭鉱労働者は、畑から盗んだ根菜で自分や家族の飢えをしのいでいると聞かされた。

（北ヨーク支部長をNCB全国広報支部長に任命）

今回の訪問で得た具体的な成果の一つは、NCBの北ヨークシャー支部長マイケル・イートンとの会見である。彼はセルビーに新しい炭坑を開いていた。以前もその手腕についてはたびたび耳にしていたが、ヨークでもその評判は高かった。いかにもヨークシャーの人間らしい、柔らかな響きのある声で、状況説明も的確でわかりやすかった。そこで彼を全国スポークスマンに任命して、NCBの広報活動の改善に手を貸してもらうことを提案した。イートン氏はすばらしい仕事をしたが、残念なことにNCBの要職にある人々からの嫉妬と妨害で、その立場は非常に難しいものになった。

（NACODS、82%がスト賛成投票）

一方、NACODSも、じわじわと脅しをかけてきた。執行部ははっきりとストを目指し、九月二十八日にスト権投票を行うと発表した。未解決の問題に関しては、ある時期同意も間近かと思われたが、休暇から戻った労組委員長に拒絶されてしまった。NCBは当初スト投票の結果を楽観視していたが、次第に雲行きが怪しくなり、その予想は暗くなる一方だった。九月二十三日、チェッカーズでイアン・マクレガー、ピーター・ウォーカーと会談し、スト賛成票が三分の二を占め、決行が認められた場合の状況予測を行った。まずNACODSがその結果を盾にNCB指導者に圧力をかけ、不平の種の排除を迫ることが考えられた。実際にストを決行する可能性もあった。そうなった場合、炭鉱労働者が操業を続けている地域ではNACODSの組合員も、仕事を続けるだろう。しかし、ダービーシャーのようなどちらともいえない地区でそ

れを望むのは難しい。また、NACODSがストに入ると、NUMが戦闘的な活動をしている地区では、炭鉱労働者の職場復帰がますます困難になるのは明らかだった。NCBの従業員で、必要な保安資格をもっているのは、NACODSのメンバーだけではない。英国石炭管理職協会（BACM）のメンバーも、多くがその資格をもっている。とはいえ、地下に潜りNACODSの敵意に満ちた視線のなかで仕事をするように、彼らを説得するのは難しい。NUM組合員のなかにも、必要な資格試験に合格し、保安係に昇格する機会を待っている者もいるが、その数は知れていた。

九月二十五日火曜日、ピーター・ウォーカーは石炭関係閣僚会議に、NACODSのスト投票は賛成に落ち着く可能性が強いと語った。その観測は正しかった。金曜日に結果が伝えられたが、何と八二・五%が賛成票を投じていたのである。

最悪の知らせだった。炭鉱ストは最初から最後まで、思いがけない方向に事態が揺れ動いた。これで安心と思わせるような動きが突然起きたかと思うと、また急に逆転した。最終的な結果がどうなるのか、一度として自信をもつことができなかった。

（ホワイトホールの官僚、スカーギル氏に有利と見る）

三月にストライキが始まった当初の数日間は別にして、この頃が一番神経をとがらせた時期だった。ホワイトホールの官僚のなかには、状況はスカーギル氏に有利と見る者もいた。NUMへの支援を呼びかけたTUCの決議がどのような結果をもたらすのか、予測がつかなかった。秋も近づいており、過激な活動家が元気を取り戻す心配があった。そして、NACODSのストの恐れもあった。

ストに賛成票を投じたNACODSのメンバーの大半は、指導者が交渉で有利に立てるようにと考えただけで、必ずしも本気でストをする気はない、と見ていた。投票後NACODS執行部は、実際のスト開始を予定より九日遅らせると発表し、この観測に多少なりとも根拠を与えた。ところが大方の指導者にとっては、ピケ・ライン突破に関するもともとの紛争は二義的な問題でしかなかった。彼らの真の目的は、NUMの条件で炭鉱ストを終結させることだった。NACODSのストを避ける、あるいは、それが困難ならば、その影響を最小限に抑えるには、労組の指導者と一般組合員の間に、楔を打ち込むのがもっとも有効と思われた。

（NCB、NACODSに謝罪、スト撤回成功）

そのためには、NCBができる限り、実質面で相手を懐柔する必要があった。NCBとNACODSは10月1日月曜日に話し合いを行った。その結果、賃金およびピケ・ラインの突破に関するガイドラインに関しては合意が見られ、NCBは八月十五日の回状を撤回した。翌日さらに、炭坑閉鎖に関する調査組織、また交渉が決裂した場合の調停方式について討議が続けられた。どちらもそれまでのように簡単に譲る気配は見せなかった。NCBとしては、どんなに綿密な調停プロセスであっても、問題に関する最終的な決定権を第三者に与えるわけにはいかない。この点は、暗黙裡に理解されていたものの、なるべくぼかしておくのが望ましかった。

（労働党大会、NUMを支援し、警察を非難）

この間われわれは、敵意に満ちた批判と圧力にさらされた。労働党大会はNUMに心からの支援を送り、警察に非難の矢を浴びせた。最悪だったのは党首キノックの演説だろう。TUC大会で強い姿勢を見せていたにもかかわらず、党内左派と労組のつき上げを受け、弱腰になって

しまった。法を破るための暴力と、法を守るための暴力との区別もつけず、ただ暴力一般を非難する世論を、これ幸いと隠れみのにしてしまったのである。あげくに暴力行為と脅迫を、彼が主張するイギリスの社会病と同一視した。「暴力は絶望のなせるわざ----- 長期にわたる失業----- 孤独、醜悪な腐敗した社会、これらが暴力行為を生み出した」。これではノッティンガムシャーで、労働党の人氣が凋落したのもうなずける。労働党党首には暴力の何たるかが理解できなかったかも知れないが、ノッティンガムシャーの炭鉱労働者とその家族には、わかりすぎるくらいわかっていたのである。

（保守党大会と並行して開かれたNCBとNUMとの交渉）

いつものように、労働党の党大会に続いて、保守党の党大会が開かれた。ブライトンに出かけた私は多くの時間を割いて、助言和解調停サービス（ACAS）におけるNCBとNUMの交渉の成り行きを見守った。ACASにはNACODSの代表も同席したが、直接交渉に加わることはしなかった。NACODSは明らかに、NUMの求める条件を勝ち取り、スカーギル氏に勝利の宣言をさせようと目論んでいた。そこで、これ以上ストを求める組合員を抑えられないなどと、脅しにかかってきた。この段階では駆け引きが何より重要になった。NCBは、炭坑閉鎖に関する独立した調査機関の設立を認める案を提出し、その調査報告を十分配慮する旨約束した。とはいえ、経営決定権を放棄する気がないのは明らかだった。ACASは、その案に多少手を加えて両者に示した。NCBは直ちに受諾したが、NUMは即座に拒絶、NACODSの反応はまだわからなかった。しかし、この時だけは、交渉上戦術的にNCBが大きくリードしていたといえるだろう。

これらの話し合いは、保守党の党大会の期間中ずっと続けられていた。レオン・ブリタンとピーター・ウォーカーは、政府の立場を擁護する、力強い演説を行った。しかし、当時われわれの関心は、もっぱらIRAの手によるグランド・ホテルの爆弾テロ事件に向けられていた。その事件で五人の友人が死亡し、私自身をはじめ閣僚、そのほか多くの人々が危ういところで難を逃れた（第14章参照）。

事件の後で大勢の人々から見舞いの言葉をいただいたが、そのなかにはガンジー夫人〔インド首相〕の名前もあった。夫人とは親しくしており、かねがね尊敬の念を抱いていた。ところが三週間も経たないうちに、今度は夫人自身が、自分のボディガード二人による痛ましい暗殺事件の犠牲になってしまった。

潮の流れが変わる

（NACODS、スト実施しないと宣言）

十月末に情勢は再び大きく変化した。一週間に三つの事件が起きたが、それらはわれわれには大いに歓迎すべきものだった。しかし、スカーギル氏にとっては、大きな痛手となったに違いない。まず、十月二十四日火曜日、NACODSの執行部が、結局ストを実施しないことで意見の一致を見た。何が起きたのか正確にはわからない。おそらく執行部の穏健派が、一般の組合員はそう素直にスカーギル氏の引き立て役を引き受けないと、急進派を説得したのだろう。

（法廷、ヨークシャーのストは違法と裁定）

第二は、ここに至ってついに民法が、その槌を振り下ろしたことである。先にヨークシャー

の二人の労働者が、NUMの提訴に踏み切ったことを記した。これに対し高等法院は、ヨークシャーのストは「正式に認められた」とはいえないという、原告の労働者に有利な判決を下した。しかしNUMはそれを無視した。その結果、労働党の党大会の最中に、啞然とするスカーギル氏の手令が送達された。

(スカーギルに法廷侮辱罪)

十月十日、スカーギル氏と組合は、法廷侮辱罪でそれぞれ一千ポンド、二十万ポンドの罰金刑に処せられた。スカーギル氏の罰金は匿名で支払われたが、NUMは支払いを拒絶したため、高等法院は組合の資産の仮差し押さえを命令した。NUMがそれに対しある程度の準備をしていた事実が後で判明したが、それにしても同組合に対する経済的な圧迫は厳しく、組合の組織力は著しく損なわれた。

(サンデータイムズ、NUM幹部リビア訪問をすっぱ抜く)

三つ目の事件は、十月二十八日に起きた。NUMへの差し押さえがあつてからわずか三日後だった。NUMの幹部の一人がリビアを訪れ、カダフィ大佐に支援を個人的に訴えたと、「サンデー・タイムズ」紙がすっぱ抜いたのである。このニュースには啞然とさせられたが、さすがのスカーギル氏の仲間も当惑したようだ。十月のはじめスカーギル氏は(スミスという偽名を用いて)、仲間のロジャー・ウィンザー氏と密かにパリを訪れ、フランスの共産主義労働組合CGTの代表と会見した。それにはリビア人も同席していた。スカーギル氏が後で説明したところによると、リビアの労働組合主義者のリーダーだという。珍しい人物がいたものだ。実際のところ、カダフィ大佐は一九六九年に実権を握ると、労働組合をすべて解散させてしまっている。カダフィ大佐は、金額は不明だが、どうやら、NUMに資金援助をしたらしい。十五万ポンドという噂である。ウィンザーのリビア訪問は、パリ会談の詰めをするためだった。

(ゴルバチョフ、NUMに資金提供)

このほかにもNUMは、やはり思いもかけない方向から資金の提供を受けていた。ソ連が実権を握っていたアフガニスタンの、ありもしない「労働組合」からである。九月には、ソ連の炭鉱労働者からも援助を受けていた事実が浮かび上がってきた。自分たちの享受している自由と高収入、働きやすい環境を見せたら、羨ましがるに違いないグループから、援助を受けていたのだ。十一月には、さらにその事実を裏打ちする報告が送られてきた。こうした援助は、明らかにソ連政府の差し金で行われたものである。そうでなければ、ソ連の炭鉱労働者が外貨を手に入れられるはずがない。われわれはソ連大使に強硬に抗議した。十二月にはじめてイギリスを訪れたゴルバチョフ氏との会談でも、この件を取り上げたが、彼はこのことを知らないといった(実際のところ、私はその後、彼がこのことを完全に知っており、支払いを許可した人々の一人だったことを示す文書の証拠を見た)。

これらの一連の出来事は、NUMの運動に痛烈な打撃を与えた。ほかの労働組合への影響も少なくなかった。イギリス国民は、自分の職のために戦う者には熱い支援を送るが、外国の力を頼んで自国の自由の破壊を試みる者には、誰であろうとまず手は貸さない。

(11月19日までの職場復帰者、クリスマスボーナスを約束)

十一月、依然としてNUMの地盤は崩壊を続けていた。NCBはその機に乗じて、労働者に職場復帰を呼びかける運動を開始した。十一月十九日までに職場に復帰すれば、かなりのクリス

マス・ボーナスを支給すると発表し、関心を集めるために、ストライキ中の労働者にはダイレクト・メールを送った。それでなくてもスカーギル氏に対する幻滅が強まっていたため、このニュースはたちまち効果を上げた。一週間のうちに二千二百三人が職場に戻った。前の週に比べると六倍もの増加である。もっとも多かったのはノースダービーシャーだった。政府としては、この動きが途絶えないよう手助けするだけで、これを政治的な手柄として宣伝するつもりはなかった。そんなことをすれば逆効果になっただろう。私は閣僚には、数字が威力を発揮するのに任せるべきだが、ボーナスの額を強調した宣伝は、続けた方がよいと助言した。とにかく国民に、スカーギル氏のさまざまな策略にもかかわらず、流れが正しい方向に着実に向かい始めたことを印象づけたかった。

十一月十二日月曜日に開かれたロンドン市長主催の晩餐会で、私は次のような演説をした。

政府の立場は揺らぐことはありません。石炭公社はこれ以上譲歩はできません。日に日に、ストから遠ざかる責任感にあふれた人々の数が増加しています。炭鉱労働者は、自分の仕事場に赴く自由を主張しています。ほかの労働組合も、このストを率いたグループの本質とその真の目的を十分に理解できたであります。

これは悲劇的なストではありましたが、成果もありました。仕事を続けた労働者とその家族の勇気と忠誠心は、いつまでも人々の記憶に残るでしょう。彼らが示した手本は、あらゆる分野で、穏健かつ合理的な労働組合主義運動を推進させる力となるでしょう。ストライキの中止は、彼らの勝利を意味することになります。

実際、私はストに参加しなかった労働者の代表と、ずっと連絡を保っていた。直接会って話したいと思ったが、二つのグループの間に、ライバル意識があるように思われた。これでは片方のグループだけに会えば、もう片方は気分を害するだろう、かといって両者いっしょに会うのは、あまりうまくやり方ではない、というピーター・ウォーカーの意見を入れて、彼らと会うのは控えたが、個人執務室には、ストが中止になったら、職場を離れなかった労働者とその妻を全員官邸に招いて感謝のパーティーを開きたいと伝えておいた。

実際にそれは実現している（翌年の三月末にウッドロー・ワイアットが開いた個人的な立食パーティーでも、彼らの何人かと会った）。

多くの人がそうだったと思うが、ストが行われている間、私はずっとその民主主義に対する脅威について、いろいろ考えてきた。七月だったが、国会の休会に先立つ一九二二年委員会の会議で、「内なる敵」についてスピーチを行ったことがある。ところがそれは強い反感を買った。私は少数のマルクス主義者の活動家を念頭に話をしたつもりだったが、批判者はそれを曲解し、炭鉱労働者全般への批判だと非難した。内なる敵の問題は、十一月二十六日月曜日の夕方、保守党主義の伝統的なふるさとであるカールトン・クラブで行った講演でも取り上げた。カールトン・クラブで講演を行ったのは、ハロルド・マクミランに次いで私が二人目だった。マクミランは、最近上院で行った、いかにも彼らしい優雅な処女演説のなかで、炭鉱ストに対する政府の姿勢に、激しい非難を浴びせたばかりだった。反民主主義の過激派がもたらす脅威を考える時、私の念頭にあったのはもちろんNUMの指導者だけではなく。数週間前にブライトン・グランド・ホテルに爆弾を仕掛け、殺人も辞さないという姿勢を誇示したIRAのテロリストも忘れてならなかった。そこで私は次のような演説を行った。

最近不思議な思想がはばをきかせています。特定の目的をもったグループに大変都合のよい思想です。すなわち、多数決で決められた結果を、おとなしく受け入れる必要はない、少数派は、採決の結果が気に入らなければ、遠慮せずに暴力、時には脅しという手段に訴えて自分の意を通せばよい、という考え方であります。マルクス主義者は評決に破れると、常に相手側の「意識が間違っている」、彼らの見解は意味がない、と非難します。ところが自分たちはどうかというと、たいていは自己の利益だけを追求するグループのために、まやかしの知的な衣を与えているだけにすぎません。

・・・民主主義が勝利を得たからには、国家の法律をないがしろにするのは、決して英雄的行為ではありません。わが国は、文明がまだ構築されていない沼地ではありません。少数派が、フェア・プレーの概念を — これは「法の順守」という意のイギリス流表現ですが、辛抱強い多数派を威圧するための口実として使うようなことは、あってはなりません。けれども現在イギリス国民が直面しているのは、まさにこの危険なのであります。一方には、同じイギリス国民のテロリストがいます。しかも彼らはテロリストの国家から資金と武器の援助を受けています。また一方には、イギリスの社会制度のなかで活動している極左翼がいます。彼らは労働組合の力と地方自治体の機関を悪用して、法律を打破し、無視し、転覆しようと謀っています。

(炭坑夫を乗せたタクシー運転手、高速道路走行中殺害さる)

労働者の戦場復帰は続いた。しかし暴力沙汰はいっこうにやむ気配がなかった。坑口から離れた場所で行われる恐喝や暴力行為は、警察の取り締まりが難しい上、やる側にとっては、教が少なくすむ。そこでNUMの闘士は、もっぱらその戦術をとっていた。数多くの被害者が出たが、特に十一月二十三日金曜日に起きた事件には、愕然とさせられた。ヨークシャー、ポンティフラクト出身の、マイケル・フレッチャーというスト破りの労働者が、自宅で炭鉱労働者の一群に襲われなぐられたのである。この件では十九人も逮捕者が出た。その一週間後、今回のストでもっとも痛ましい事件が起きた。仕事に向かうサウスウエールズの炭鉱夫を乗せたタクシー目がけて、高速道路の橋の上から三フィートのコンクリートの柱が落とされた。タクシーの運転手デービッド・ウィルキーが死亡した。私はこれらの人々の残虐行為には際限がないのだろうかと考え込んだ。

(婦人たち、NUMとNCBとの早期交渉を期待)

クリスマス・ボーナスを得るための締め切り期日だった十一月十九日を過ぎると、職場復帰の動きが少し緩慢になってきた。職場に出ている鉱夫の妻が、その理由を書き送ってきた。復帰の意思はあるが、クリスマス休暇中に家族に危害が及ぶのを恐れて、戦場復帰を休暇後に予定している者がいること、もう一つは、NUMとNCBの間で新たな交渉が始まるというニュースが流れていること、の二点だった。交渉の噂はいつも職場復帰の動きを鈍らせた。

(TUC書記長、NUMの暴力行為を批判)

しかし、スカーギル氏が非妥協的な態度を変えない限り進展はないと見られたものの、話し合いを回避するわけにはいかなかった。TUCの幹部は、ロバート・マクスウェルを調停役に立て、スカーギル氏とその一派が面子を失うことなく解決する方法はないものかと、模索していた。だが実際は、過激な活動家を屈服させるには、スカーギル氏らの面子をつぶし、仲間であ

るはずの労働者の前で敗北を味わわせ、かつ彼らから拒絶されるように仕組むほかはなかった。

おそらく組合の指導者の一部は、それに気づいていただろうと思う。気づく理由があったのである。TUCの書記長ノーマン・ウィリスは、労働党の指導者とは異なり、尊敬すべき方針に則って行動していた。月はじめにサウスウエールズで開かれたNUMの集会では、ピケ・ラインで発生した暴力事件を非難する演説を行ったウィリスに向かって会場から怒号と罵声が飛んだ。その時私をはじめ何百万という国民が見ていたテレビ画面に、背筋が寒くなるような光景が映った。先端を輪にした綱が天井からするすると降ろされ、ウィリスの頭のすぐ上でびたりと止められたのである。

（GMWU、TUCとの交渉を望む）

GMWU（一般地方自治体労働者組合）の書記長デービッド・パースネット、ASLEF〔機関工・火夫連組合〕書記長レイ・バクトンの二人は、ピーター・ウォーカーと非公式に面談し、問題解決にTUCが動いてほしいという要望を伝えてきた。それにどう答えるか、私はじっくりと考えた。TUCが力と力をとるもつ仲介者という従来の立場なら、官邸に招き入れるのはおよそ好ましくない。かといって素っ気なく拒絶すれば、組合の穏健派が離反してしまう恐れがあった。

十二月五日水曜日の夜、ピーター・ウォーカーとトム・キングは七つの主要組合の代表と、長時間にわたり話し合った。これらの代表が、スト解決の具体的なアイデアをもっていないのは明らかだった。十二月十三日木曜日の朝、官邸において、ピーター・ウォーカーおよび関係省庁の実務者と、TUCがイニシアティブをとるという案に、どう対応すべきかを討議した。TUCは、労働者の職場復帰を先行させ、その後に業界再建計画について期限付きの討議をするという案を、NUMおよびNCBに提案するつもりだった。

期限は八十二週間だという。TUCはその実に、政府の支持が得られるかどうかをたずねてきた。

（譲れない3原則）

ピーターは、いくつかメリットがあるという見方をしていたが、私は問題点の方が目についた。われわれには絶対に譲れない三つの原則がある。石炭産業の将来に関する話し合いは、いかなるものでも、労働者が職場に復帰してから以後に行う。ストに参加しなかった労働者の地位を脅かす恐れのある条項には、一切同意しない。炭坑閉鎖計画の撤回、あるいは交渉が続けられている間は閉鎖延期という、NUMの要求に屈したような印象を絶対に与えない。以上の三点である。NCBが、NACODSとの協定にもとづいて修正を加えた現行の炭鉱実態調査を、自由に実施できる立場にあることを、明確に示す必要があった。しかし結局、金曜日の朝ピーターがTUCの幹部と会見し、戦場復帰後に業界の将来について討議するという方針にもとづいたTUC案を、政府が支持する旨伝えることに私は同意した。NACODSとの協定によって修正された炭鉱実態調査を、そのまま継続するということだった。

ピーターとトムは、翌日TUCの代表と会った。しかし、成果はまったくなかった。TUCはスカーギル氏から交渉の権限を与えられていたわけではなく、彼らはクリスマス前にスト中止のイニシアティブをとることはできないという結論に達したのである。

(NUMのメンバーの50%以上の復帰は政府の勝利)

年末を控え、われわれの主な関心は、新年の最初の月曜日である一月七日に、さらに多くの労働者の職場復帰を促すことに注がれた。クリスマスのボーナスを得るための期限は過ぎてしまったが、近いうちに職場復帰すれば、スト参加者にはほかにも経済的に大きな利点があった。会計年度が変わる三月三十一日までに復帰すれば、今年度はほとんど所得税を払わなくてすむからである。NUMのメンバーの五〇%以上が復帰すれば、政府の作戦は大勝利となる。五〇%を超えれば、全体投票でスト中止を決定したのと、実質的にもまたイメージ的にもまったく同じになる。それにはあと一万五千人の復帰が必要で、そのためにNCBは手紙や新聞広告による奨励作戦の準備に余念がなかった。

(ウォーカー、石炭不足による停電はないと声明)

もう一つの重要なポイントは、スカーギル氏による必死のでたらめの予測と正反対に、この冬は停電を心配する必要がないという事実を炭鉱労働者にも国民にも浸透させることであった。政府は絶対的な確信がもてるまで、電力の供給予測に触れるのを避けていたが、十二月二十九日、ついにウォーカーがCEGB総裁からの知らせを国民に発表することができた。総裁によると、現在の石炭生産の水準が維持できれば、翌一九八五年一年間は停電の心配はないということだった。

ストライキ崩壊の始まり

問題はこれらの事実が一月にどのような結果をもたらすかであった。月はじめは悪天候のために一部地域で、職場復帰の動きが鈍った。天候は石炭の輸送にも影響を与えた(冬を迎えた当座は、厳しい冬にならねばよいかと心配した。幸い全体的には恵まれたといえるだろう)。しかし、一月中にしだいに復帰率は上昇した。月半ばにはストをやめたNUMのメンバーは、約七万五千人となり、週に二千五百人の割合で増加していた。明らかに終わりは近づいていた。復帰には一つのパターンが生まれているようだった。ストライキに見舞われた炭坑では、就業を続けている鉱夫が「前進基地」をつくったのである。戻りたいと強く願っている鉱夫が、五十人くらい集団をつくってともに入坑した。それも一番目立たない木曜か金曜を狙って行うことが多かった。その後は事がすみやかに運んだ。労働者の復帰率に比べて、生産量の伸びは遅々としていたが、状況は明らかに望ましい方向に進んでいた。

事態の進展を遅らせている要因は、予定されている交渉にあると考えられたが、その推測は正しかった。

一月二十一日月曜日にNCBとNUMが「交渉のための交渉」をするというニュースが伝わると、復帰率は前の週の半分に落ち込んだ。

(国民の関心、外国に隠蔽されたNUM資金仮差し押さえに集まる)

一方、社会の関心は次第に、外国に隠蔽されたNUM資金を追跡する、仮差し押さえ係官の動向に集まってきた。十二月はじめ、就業を続ける労働者がさらに法的措置を求めた結果、NUMの被信託人が排除され、新たに管財人が指名された。これらの措置が原則的には法廷の分野であるのはいうまでもなかったが、どんなに法律で武装しても、資金を追跡することは困難であり、仮差し押さえ人が費用をカバーすることすらできない可能性があった。そこでマイケル・ヘイヴァーズは、十二月十一日火曜日の下院で、政府がそうした損失を補償する用意が

あると発表した。苦闘する裁判所を手をこまねいて見過ごすわけにはいかなかった。

政府は対外的にも一役買い、アイルランド、ルクセンブルクといった、NUMが資金を移していた国の政府にできる限りの協力を依頼した。一月末には約五百万ポンドが取り戻された。

（キノック党首に態度鮮明化を迫る）

スカーギル氏の立場が絶望的というならば、労働党の立場はこっけいであった。この時期に下院にまたもや議責動議が上程され、私は政府を擁護する演説を行った。前回と同じく、私は労働党党首キノックに、遅きに失してはいるが、その立場を明確に示すように迫った。

キノック党首、ストライキが行われている間、あなたには、NUM執行部に抵抗する道と沈黙を守る道と、常に二つの選択肢がありました。あなたが選んだのは沈黙でした。NUM執行部が組合の規約を無視し、投票による採決というプロセスを踏まずにスト宣言をしても、何もいいませんでした。一般の炭鉱労働者が民主的な方法でスト反対を表明したにもかかわらず、ピケ隊は暴力をもって、ノッティンガムシャーその他の炭鉱を封鎖しました。その時もあなたは沈黙を守りました。NUMがオーグリーブを暴徒の支配下におこうとした時も、動きませんでした。TUC委員長が勇気を奮ってNUMの指導層に、その戦術を非難するにいたって、ようやくその後ろで小さな声を上げたにすぎません――野党の党首である、あなたにお聞きしたいと思います。協定に同意するようNUMを説得するつもりがあるのかないのか（議場から返答を迫るほかの議員の声も聞こえた）。こうたずねても、おそらくあなたは答えないでしょう。あなたにはその勇気がありませんから。

（いかにしてストを中止させるか）

いまや問題は、いつ、いかにしてストを中止するかであった。二月初旬、職場に戻る労働者の数が再び落ち込んだ。交渉再開の可能性が出てきたからである。TUCは依然、NCB、NUMの間で調停役を務めようとしていた。この頃にはNCBも、NUM執行部が事実を捏造して自分たちの利益を図ることのないよう、交渉に際してすべてを書面に記すという術を覚えていた。一方スカーギル氏は、相変わらず採算性を理由とした炭坑閉鎖には同意しないと、公言し続けていた。当然のことだが、交渉の続行は、スト破りをした労働者とその家族を困惑と不安に陥れた。二月四日月曜日、私はある鉱夫の妻宛てに、励ましの手紙を送った。

NUMの執行部が混乱を引き起こした責任から逃れようとしていると、心配なさるお気持ちはよくわかります。けれども、NCBはこれまでもそうでしたが、これからも譲歩することはないと思いますので、安心してください。私としては、繰り返しいってきたように、肝心な問題にいかげんな決着をつけるつもりはなく、職場を離れず政府を支えてくれた炭鉱労働者を裏切るような真似は、決してしません……。

この頃には、さしものNUM幹部も、前年秋のNACODS紛争以来、形勢が完全に不利になってきたことを認めざるを得なくなっていた。NACODSは交渉を再開し、NUMを救済するようNCBに圧力をかけるまでになっていた。しかし、NCBは過去の苦い経験から、新たな実力行使の口実とされるような言質をNACODSに与えることを避けた。

（スカーギル、譲歩する気持ちなし）

TUCの指導者たちも、何とか戦闘派を屈辱に満ちた敗北から救おうと、努力を続けていた。しかし、スカーギル氏には、譲歩する気持ちは毛頭なかった。実際彼は、NCBの提案をのむ

くらいなら、協定など結ばずに職場に戻った方がましだとさえ公言していた。一方NCBは、NUMが依然固執している条件では、交渉の意味がないとTUCに伝えていた。TUC、とりわけ書記長が、いろいろな動機はあるにせよ、善意で動いているのは間違いなかった。ここまでくれば彼らも、スカーギル氏を相手に話をまとめるのは不可能だと、悟ったに違いない。そこでTUCの代表が会見を求めた時、私はそれに応じることにした。

(TUC代表と会見)

ノーマン・ウィリスをはじめとする組合の指導者と官邸で会談したのは、二月十九日火曜日の午前中だった。政府側はウィリー・ホワイトロー、ピーター・ウォーカー、トム・キングが出席した。会談はなごやかな雰囲気の中で行われた。ノーマン・ウィリスは、NUMの見解を、実に見事に善意に解釈して見せた。

(スト終結の条件—炭坑閉鎖はNCBで決める)

それに応えて、私はTUCの努力を大いに評価していることを伝えた。私自身もできるだけ早くストライキの解決を見たいと願っていた。しかし、それには紛争の争点である問題の、明らかな解決が不可欠だった。曖昧な条件でストを終結するのは、誰の利益にもならない。解釈をめぐっての争いや、背信行為への非難から、再度紛争の種となる危険がある。NUMのリーダーが見解を大きく変えた証拠があるというウィリスの意見には、同調できなかった。しかし、NACODSとの協定を十分尊重するつもりであり、その実現には何ら問題がないことは保証した。ストを効果的に終結するには、不可欠のポイントがあった。閉鎖のプロセスに関して両者が明確に理解する、経営権と最終的な決定権をもつのはNCBであることを確認する、経済効率も閉鎖の決定条件に入れることを認める、という三点である。

ストライキの終わり

(三月三日日曜日、NUM代表者会議スカーギルを無視、職場復帰を可決)

もはやTUCには、一人歩きを始めた事態を收拾する意思もなければ、その力もないことが、炭鉱労働者にも一般国民にも明らかになってきた。大勢の労働者が炭鉱に戻り始め、復帰率は上昇し、二月二十七日水曜日、ついに鍵となる数字を超えた。NUMのメンバーの半数以上がストから難脱したのである。三月三日日曜日、NUM代表者会議は投票を行い、スカーギル氏の助言を無視して、職場復帰を可決した。その後数日の間にもっとも戦闘的な地域の労働者までもが坑内に戻った。その日曜日、私は十番地の外で報道陣のインタビューに応じた。今回の争議でもし勝利者という者がいるとしたら、それは誰かという問いに、私は次のように答えた。

(勝利者は誰か—働く労働者全員)

誰が勝ったかといえば、それは仕事を続けた炭鉱労働者、港湾労働者、発電所の労働者、トラックと鉄道の運転手、それに同じく職場を守った管理職の皆さんです。いい換えれば、イギリスの産業の車輪を回し続け、ストにもかかわらず昨年記録的な生産高をもたらした、すべての人々が勝利者といえるでしょう。イギリスを守ったのは、働く労働者全員です。

(5月、マグレガーと会見)

こうしてようやくストライキは終わった。始まってからほぼ1年が経っていた。次の冬に

NUMの活動家が新しい口実を見つけ、ストを打つ可能性がゼロだったとは、いまでさえいいきれない。そこで政府は、石炭と石油の備蓄を再開する手筈を整え、石炭業界の動向を細心の注意をもって監視した。特に、炭鉱が関心の的でなくなったいま、ストを離脱した労働者とその家族に危害が及ぶ心配があった。私は五月にはマクレガー氏と会い、彼らに十分な配慮と支援を与えることがいかに大切かを強調した。

（スカーギルの狙いーストを通じて全体主義国家を志向）

労働争議という面から見れば、炭鉱ストはまったく不要なストであった。NUMは最初から最後まで、採算がとれない炭坑の閉鎖は認めないという態度を押し通したが、これは非合理的としかいいようがない。私の首相在任中、似たような要求をした、ましてやそのためにストライキに突入した労働組合は、一つもなかった。財政困難でしかも競争力も低い石炭産業が、しばらくの間でも機能することができるのは、国有化と強制労働指導、関税障壁をとまなう包囲経済の全体主義国家でしかなかった。ところがスカーギル一派は、それを望んだのである。炭坑閉鎖に関する、およそ受け入れがたいNUMの要求を見れば、声明や討議だけではもの足りないかのように、強引に突入したストの本質が、さらによくわかるだろう。

（ストで分かったことー国際競争力ない産業は淘汰される）

国営、民営を問わずほかの産業に作用している経済の諸要素に、イギリスの石炭産業もまた制約されざるを得ないことが、このストライキによって明白になった。莫大な投資にもかかわらず、イギリスの石炭には、世界市場で戦うだけの競争力がなかった。その結果、いまではストライキ当時に誰も予想できなかったほどの衰退を見ている（下286ページ参照）。

（左派のファシストはイギリス支配できないことを国民が知ったこと）

とはいえ、この炭鉱ストは、単に不採算の炭坑をどうするかといった問題だけではすまなかった。それは政治ストだった。したがってその結果は、経済以外の面でも大きな意義もっていた。イギリスは労働組合の同意があつてのみ統合できる国だというのが、一九七二年から八五年までの世の知恵であった。どんな政府も、大ストライキを破ることはおろか、抵抗もできなかった。炭鉱労働者によるストライキは特にそうだった。われわれが労働組合法を改革し、鉄鋼ストライキのようにそれほど大きくない争議に打ち勝っている時でさえ、左翼の多くの人たちも左翼でない人たちも、炭鉱労働者は最後に拒否する力をもっており、ある日それを行使するだろうと信じ続けていた。その日がいま来て、そして終わった。ストライキに抵抗するわれわれの決意は、一般の労働組合員に戦闘派に対する戦いを挑む勇気を与えた。ストライキの敗退が立証したことは、左派のファシストがイギリスを統治不能にすることはできなかったということである。マルクス主義者たちは、経済の法則に挑戦するために国の法律に挑戦しようとした。彼らは失敗し、その行為を通じて、自由経済と自由主義社会が実際にどんなに密接に依存し合っているかを示すことになった。これは誰もが忘れてはならない教訓である。

表1 各国の労働争議件数の推移

(件)

国名	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
アメリカ	29	34	17	39	29
カナダ	284	379	413	377	379
イギリス	216	166	205	212	194
ドイツ	144	46	200	67	48
フランス	1,607	1,475	2,319	3,142	2,131
韓国	78	129	198	250	235
シンガポール	253	291	246	231	266
インドネシア	234	272	125	273	174
タイ	23	8	16	13	—
マレーシア	5	12	11	11	13
フィリピン	93	92	58	60	43
オーストラリア	447	519	731	698	675

資料出所 各国資料及びILO “Yearbook of Labour Statistics 2002”

(注) 労働争議件数の定義は各国ごとに異なるので、厳密な比較はできない。

表2 各国の実質GDP成長率の推移

地域別	国名	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	(%) 2003年 1～3月
欧米諸国及びEU	アメリカ	2.7	3.6	4.4	4.3	4.1	3.8	0.3	2.4	2.0
	カナダ	2.8	1.6	4.2	4.1	5.5	5.3	1.9	3.3	2.6
	イギリス	2.8	2.6	3.4	2.9	2.4	3.1	2.1	1.8	2.1
	ドイツ	1.7	0.8	1.4	2.0	2.0	2.9	0.6	0.2	0.5
	フランス	1.9	1.1	1.9	3.6	3.2	4.2	2.1	1.2	1.1
	EU	2.4	1.6	2.5	2.9	2.8	3.5	1.6	1.0	1.0
アジア	韓国	8.9	6.8	5.0	-6.7	10.9	9.3	3.1	6.3	3.7
	中国	10.5	9.6	8.8	7.8	7.1	8.0	7.3	8.0	9.9
	シンガポール	8.0	8.1	8.5	-0.9	6.4	9.4	-2.4	2.2	1.6
	インドネシア	8.2	7.8	4.7	-13.1	0.8	4.9	3.4	3.7	3.4
	タイ	9.2	5.9	-1.4	-10.5	4.4	4.6	1.9	5.3	6.7
	マレーシア	9.8	10.0	7.3	-7.4	6.1	8.5	0.3	4.1	4.0
	フィリピン	4.8	5.8	5.2	-0.6	3.4	6.0	3.0	4.4	4.5
大洋州	オーストラリア	4.0	4.0	3.6	5.5	4.4	3.0	2.8	3.4	2.9
	ニュージーランド	3.3	2.6	2.9	-0.6	4.8	3.9	2.0	4.6	—
	ロシア	-4.1	-3.6	1.4	-5.3	6.4	10.0	5.0	4.3	6.8

資料出所 各国資料及び内閣府「海外経済データ」

(注) 前年同期比

表3 失業率、欧米の動向

	失業率			
	アメリカ	ドイツ	イギリス	フランス
	季節調整値	季節調整値	季節調整値	季節調整値
	%	%	%	%
2001年	4.7	9.4	4.9	8.7
02	5.8	9.8	5.2	8.8
03	6.0	10.5	5.0	9.8
04	5.5	10.5	4.8	9.9
05	5.1	11.7	4.7	9.8
05年11月	5.0	9.0	5.1	9.7
12	4.9	9.0	5.1	9.6
06年1月	4.7	8.6	5.1	9.6
2	4.8	8.5	5.2	9.6
3	4.7	8.3	5.2	9.5
4	4.7	7.9	5.3	9.3
5	4.6	8.1	5.4	9.1
6	4.6	8.0	5.5	9.0
7	4.8	8.0	5.5	8.9
8	4.7	8.2	5.5	9.0
9	4.6	8.2	5.6	8.8
10	4.4	7.8	5.5	8.8
11	4.5	7.7		8.7
12	4.5			
資料出所	米:アメリカ労働統計局「Labor Force Statistics」 独:ドイツ連邦統計局「Beschäftigung und Arbeitsmarkt」 (年データは、ドイツ連邦銀行発表資料) 英:イギリス国家統計局「Labour Market Statistics」 仏:フランス国立統計経済研究所「Employment and jobs」			

(注) アメリカ：軍人を除く。

ドイツ：軍人を除く。

イギリス：当月を含む前3か月の平均値。例えば3月の欄は1月～3月の平均値。

表4 諸外国の労働組合組織率の動向

	アメリカ	イギリス	ドイツ	タイ	韓国
	%	%	%	%	%
1975年	24.5				23.0
80	23.9		40.3		20.1
85	18.0		41.9		15.7
91	16.1		41.6	1.7	19.1
92	15.8		40.2	1.9	17.8
93	15.8		38.5	2.0	16.9
94	15.5		37.2	2.0	16.1
95	14.9	32.6	36.0	2.3	15.1
96	14.5	31.7	35.3	2.3	14.5
97	14.1	30.6	34.8	2.1	13.3
98	13.9	30.1	32.2	2.0	13.7
99	13.9	29.8	30.0		14.7
2000	13.5	29.7	29.0		14.3
01	13.4	29.3	27.0		14.2
02	13.2	29.2	26.6		13.5
03	12.9	29.3			13.0
04	12.5	28.8			12.4
05	12.5	29.0			11.9
	12.0				
資料出所	米国労働統計局 「Union Membership in 2005」	英国経済産業省 「Trade Union Membership 2005」	厚生労働省 「海外情勢報告」		韓国労働 研究院「Labor Statistics」

(注)

ドイツは、1990年以前は、旧西ドイツ地域。

イギリスはグレートブリテン。

旧第四条；(生産、分配、交換手段の公有の基礎の上に、そして各産業又はサービスの民衆による管理と統制の最善のシステムの上に、産業の全成果及び可能な限り公平なその分配を、肉体的及び精神的労働者に対して確保すること)

新第四条；(レイバー・パーティは、民主的社会主義者の政党である。それは、我々の共同の努力の強化によって、我々が孤立して達成する以上のものを達成し、我々一人ひとりに対しては我々の真の可能性を実現する手段を創り出し、我々全てに対しては、権力や富や機会が少数者ではなく多数者の手にあるようなコミュニティを創り、そこでは我々の享受する権利は我々の負担する義務を反映し、我々は連帯と寛容と互敬の精神で自由に共に生きることを信じる)

参考文献；

- (1) 早川征一郎「イギリスの炭坑争議」、(1-9)、「石炭研究月報、法政大学大原研究所、1985」
- (2) 舟場正富『ブレアのイギリス』、(PHP新書、1998年11月)
- (3) 中村靖志「現代のイギリス経済」(九州大学出版会、1999年10月)
- (4) 山崎勇治「サッチャー首相の国有産業攻撃の意図」、(北九州大学『商経論集』、第24巻、第3号、1989年2月)
- (1) 同上、「イギリス炭鉱スト(1984-85年)とサッチャー政策」ーイアン・マグレガー石炭庁総裁とのインタビューを中心としてー、(北九州大学『商経論集』、第39巻、第1号、1987年12月)
- (2) John Lloyd "Understanding The Miners' Strike" "Fabian Tract 504, June 1985.
- (3) Margaret Thatcher, "THE DORNING STREET YEARS, Harper Collins Publishers, 1993..
- (4) IAN MACGREGOR, "The Enemies Within" ,COLLINS, 1986